

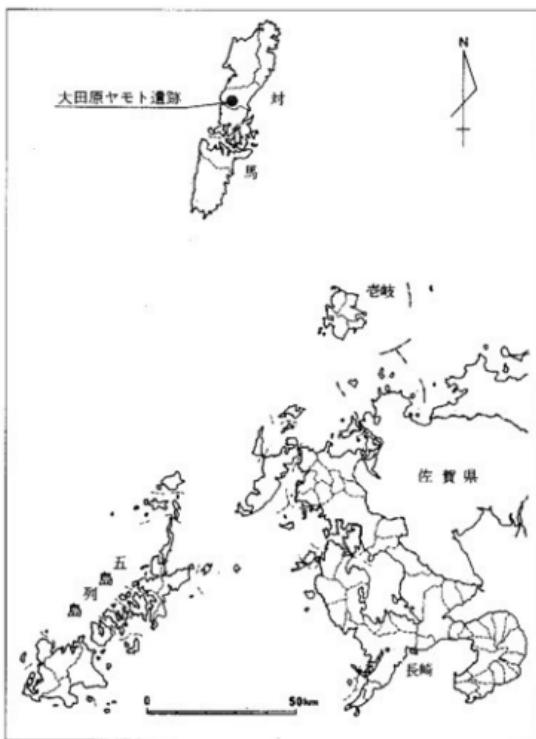
峰町文化財調査報告書 第10集

大田原ヤモト遺跡

1993

峰町教育委員会

大田原ヤモト遺跡



1993

峰町教育委員会

発刊にあたって

このたび、本町の大字吉田にあります大田原ヤモト遺跡に関する調査報告書を刊行することになりました。

この遺跡につきましては、平成4年県事業であります吉田・賀佐線一般農道整備事業の工事中、偶然にも土器片が発見されたことから、緊急に発掘調査の必要が生じてまいりました。

峰町教育委員会は工事担当者である対馬支庁へ遺跡発見の旨を申し伝えたところ、即日工事の中断と発掘調査への全面支援という迅速な対応をしていただきました。

発掘調査は前後約一ヶ月にわたりおこなわれ、対馬では未確認であった様々な土器が今回の調査で明らかにされたことは、偏に関係各位の文化財に対する深いご理解とご指導の賜であると教育委員会職員一同感謝する次第であります。

ここに、一ヶ月の長期にわたり、発掘調査の指導をしていただいた県文化課埋蔵文化財班係長安楽勉先生、同文化財保護主事本田秀樹先生には心より敬意と感謝を捧げるものであります。

亦、発掘期間中、吉田の皆様には大変ご迷惑をお掛け致しました。皆様の一方ならぬご協力とご支援により発掘調査書を発刊するまでに至りました。

誠に有難うございました。

1993年3月31日

峰町教育委員会
教育長 薦 田 仁

例　　言

1. 本書は、長崎県上原郡峰町大字吉田字大田原ヤモトに所在する大田原ヤモト遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は平成4年3月4日～同年3月8日まで試掘調査を行ない、平成4年6月22日～同年7月16日まで本調査を実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。

調査総括	薦田　仁	峰町教育長
	小山　大三	峰町教育委員会生涯学習課長
	国分　敏久	//　体育文化係長
調査担当	阿比留　伴次	峰町教育委員会体育文化係主事
調査指導	安楽　勉	長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班係長
	本田　秀樹	//　文化財保護主事
調査協力	松村　利宏	峰町教育委員会庶務課主査
	松村　哲子	//　社会教育指導員
	御手洗　美千代	//　社会教育指導員
発掘協力者	富村真也、川上浩正、松村温子、永留留美、国分恵理、龍造寺松芳 中村久雄、中村　清、国分雪子、中村　末、中原成江、中村田鶴子 阿比留きく代、阿比留徳代、龍造寺峰代、中村イセ子、松村久子 阿比留松代、早田紀美代、松村しおり、永留喜子、高部由美子、島井麻美	
整理協力者	荒木美保、渡辺洋子、徳永妙子、森　洋子、斎藤いづみ	

4. 本書は分担執筆し、各項の執筆者は本文目次に記した。

5. 本書の編集は本田による。

本文目次

I. 調査に至る経緯	1 (阿比留 伴 次)
II. 遺跡の地理的・歴史的環境	2 (阿比留 伴 次)
1. 地理的環境	2 (〃)
2. 歴史的環境	2 (〃)
3. 周辺の遺跡	5 (〃)
III. 調査	
1. 調査の概要	6 (阿比留 伴 次)
2. 土層	6 (〃)
3. 出土遺物	10
(1) 弥生時代	10 (阿比留 伴 次)
(2) 古墳時代	15 (本田 秀樹)
1) 土師器	15 (〃)
2) 須恵器ほか	18 (〃)
(3) 製塙土器	26 (阿比留 伴 次)
(4) 漢入陶磁器	30 (安楽 勉)
1) 中国産輸入陶磁器	30 (〃)
2) 朝鮮産輸入陶磁器	32 (〃)
3) 雜釉陶磁器	32 (〃)
4) その他の土器	34 (〃)
(5) その他の遺物	38 (阿比留 伴 次)
IV. まとめ	40 (本田 秀樹)

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)	3 * 4
第2図 大田原ヤモト遺跡位置図およびグリッド配置図.....	7
第3図 試掘場・本調査区土層断面図 (S = 1 / 80)	9
第4図 弥生時代遺物実測図① (S = 1 / 3)	11
第5図 弥生時代遺物実測図② (S = 1 / 3)	13
第6図 弥生時代遺物実測図③ (S = 1 / 3)	15
第7図 古墳時代遺物実測図① (S = 1 / 3)	17
第8図 古墳時代遺物実測図② (S = 1 / 3)	19
第9図 古墳時代遺物実測図③ (S = 1 / 3)	21
第10図 古墳時代遺物実測図④ (S = 1 / 3)	23
第11図 製塙土器実測図① (S = 1 / 3)	27
第12図 製塙土器実測図② (S = 1 / 3)	29
第13図 輸入陶磁器実測図① (S = 1 / 2)	31
第14図 輸入陶磁器実測図② (S = 1 / 2)	33
第15図 輸入陶磁器実測図③ (S = 1 / 2)	35
第16図 その他の土器および石鍋 (S = 1 / 2)	37
第17図 その他の遺物① (S = 1 / 1)	38
第18図 その他の遺物② (S = 1 / 2)	38
第19図 その他の遺物③ (S = 1 / 3)	39

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景（東から）・遺跡遠景（東から）・試掘墳土層断面	43
図版 2	本調査区西壁土層断面・遺物出土状況・遺物出土状況	44
図版 3	調査風景・調査風景・本調査区全景（南から）	45
図版 4	弥生時代遺物①（S = 1 / 3）	46
図版 5	弥生時代遺物②（S = 1 / 3）	47
図版 6	古墳時代遺物①（S = 1 / 3）	48
図版 7	古墳時代遺物②（S = 1 / 3）	49
図版 8	古墳時代遺物③（S = 1 / 3）	50
図版 9	製塙土器①（S = 1 / 3）	51
図版10	製塙土器②（S = 1 / 3）・その他の遺物①（S = 1 / 2）	52
図版11	輸入陶磁器①	53
図版12	輸入陶磁器②	54
図版13	輸入陶磁器③	55
図版14	その他の土器	56
図版15	その他の遺物②（S = 1 / 3）	57
図版16	試掘調査参加者・本調査参加者	58

I. 調査に至る経緯

平成4年3月、峰町教育委員会は地元の建設業者の方から「土器がちらばっとるけちょっと来てみんや」との一報を受けた。これにより長崎県遺跡地図(昭和62年刊)に未記載の新たな遺跡であることが判明した。遺跡名は小字名を探り大田原ヤモト遺跡とした。遺跡は峰町大字吉田字大田原、旧吉田小学校講堂の北側、吉田・賀佐線の農道上に散布していた。平成5年3月現在、吉田・賀佐線一般農道整備工事は長崎県の補助事業として続けられており、平成4年3月、遺跡発見当时、工事は端緒を開いたばかりであった。工事主体者の対馬支庁耕地課と県文化課及び峰町教育委員会は遺跡保存について協議した結果、遺跡の位置する農道上の整備工事の設計変更は土地狭隘のため無理と判断し、県文化課の指導の下に、峰町教育委員会が緊急を要する工事上の重点箇所を発掘調査する事とした。

調査により、遺跡は弥生中期から中世までの遺物を含む包含層であることがわかった。又、出土遺物から次の3点が問題を提起した。

1. 対馬では未確認の土器が出土したこと。
2. 出土した土器から、弥生時代、あるいはそれ以降の住居跡の発見の可能性があること。
3. 出土遺物及び地層から古代の吉田(朽木)の地理的、歴史的な環境が推測出来ること。

以上3点を重要課題とし、本調査の準備を進めた。

本調査の必要性は農道整備事業の設計変更是不可能ということから、遺跡の破壊は免れ得ぬので、三者協議の結果、吉田住民の生活道であり、農繁期もまじかに迫っているので住民の迷惑にならない時期を選び発掘調査を実施する事で合意した。

本調査は平成4年6月22日から7月16日までの25日間実施することになり、調査費については、工事主体者である長崎県の負担を仰ぎ、調査は峰町教育委員会が主体となり阿比留伴次が担当したが、県文化課からも終始指導をいただいた。

II. 遺跡の地理的・歴史的環境

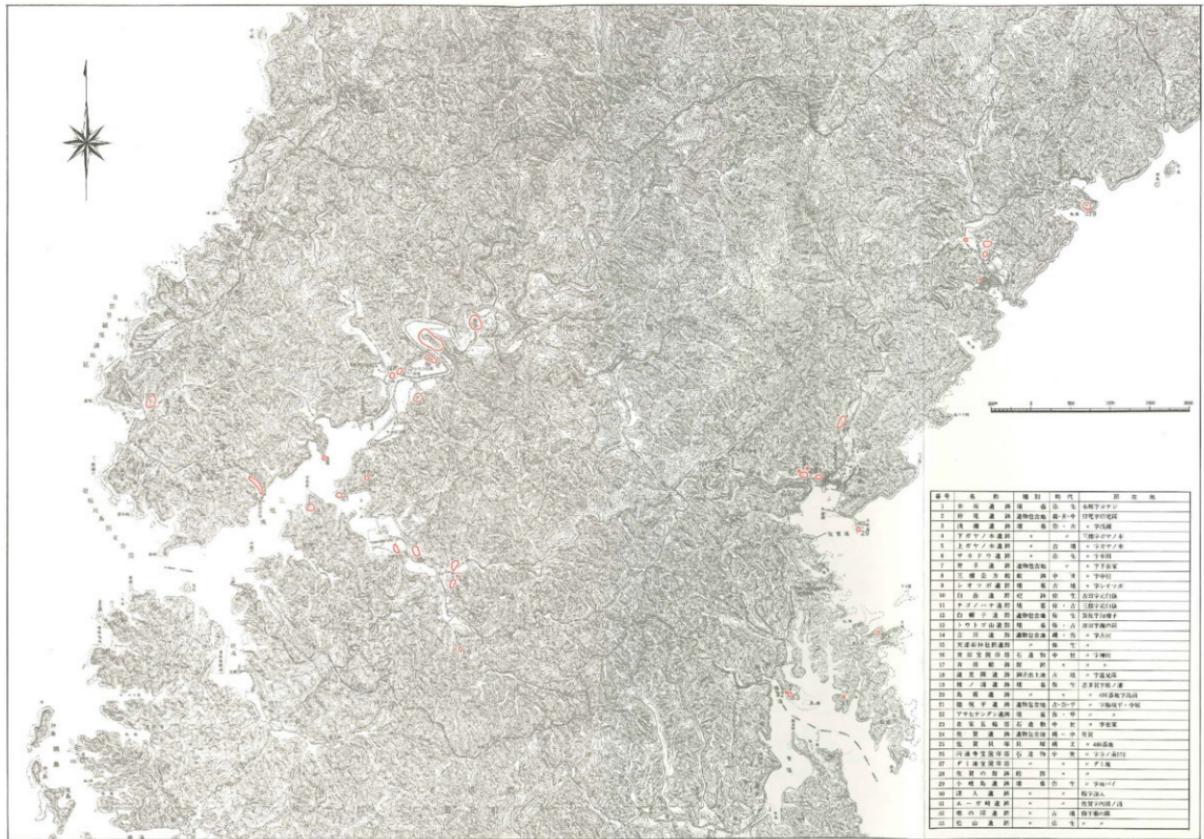
1. 地理的環境

対馬は朝鮮半島に近く、気象条件が整えば島北部から釜山の山並みが展望でき、同様に島南部では壱岐が望見できる。島はやや東に傾いた南北約80kmの細長い島である。対馬は山が多く、南北に縱走する。標高のわりには峻陥で、海岸では断崖をつくり孤星島の天然要害となる。故、平地は乏しく土地は瘦せている。峰町は対馬のほぼ中央に位置する。現在の行政区画で北から上対馬町・上県町・峰町が上県郡、豊玉町・美津島町・厳原町が下県郡に属する。

峰町の境界は上対馬町、上県町、豊玉町の三町に接する。六町の内、面積、人口ともに一番少ないので峰町である。峰町は10の地区からなり、各地区とも海に面したわずかな平地に住まう。東面(ひがしめ、東海岸)は耕地に乏しく漁業が盛んで、西面(にしめ、西海岸)は東面に較べ耕地が開け水田地帯が広がる。峰町に限らず対馬は東海岸は峻陥な断崖が続き、耕地は狭く漁業が盛んで、西海岸は耕地が開け農業が盛んである。峰町の最大の穀倉地帯は西面の三根、吉田である。三根川が三根の穀倉地帯を作り、対馬で二番目の深い入江を持つ三根湾へ流れこむ。三根湾の支浦、吉田浦は吉田川を本流とする。吉田川下流域一帯を大田原と呼び、乾田が広がり吉田地区の穀倉地帯の中心をなす。遺跡は大田原の南南西の山裾にある。吉田地区はここから南東に奥へと広がる。

2. 歴史的環境

峰町は平安時代の「和名類聚抄」に三根郷とみえる。中世には三根郡、近世再び三根郷となり、明治には10村が合併して三根村となり、昭和51年町制施行により峰町となった。古代より「みね」の郷名と郷域を一貫して伝えてきた。朝鮮の歴史書「海東諸国紀」(1471)は中世の対馬の様子を伝え、82浦に散在する集落の戸数を記している。峰町は5浦の部落と戸数が記載されている。沙加浦(佐賀浦)500戸、時多浦(志多賀)350戸、仇時老浦(稚)30戸、美女浦650戸、仇知只浦(朽木)三処合100戸(朽木は吉田の古名)。82浦の集落のなかで特に三根と佐賀は多い。この時代、宗氏は佐賀に館を構え(1408~1486)対馬の政治と経済の実権を掌握していたので、佐賀と三根に人口が集中したのであろう。更に、「海東諸国紀」はこれら浦に住む人々は塩を焼き、魚を捕り生活していると記している。15世紀の朝鮮の歴史書が記す対馬の状況は、3世紀の中國の歴史書が記す対馬の状況に酷似する。魏志倭人伝は3世紀の対馬を「良田無く、海産物を食して自活し、船に乗って南北に市羅す」と記す。3世紀と15世紀、島民の生活はさほど変わらない様である。対馬島民の海洋性が喪失したのは、江戸幕藩体制の骨格である「土地」に組み込まれてしまったからである。それ以前、対馬の人々は海に生きる人々であった。



又それ故の不幸な歴史を味わう事になる。古代より日本外交の最前線にあった対馬は侵略する側の歴史と、侵略される側の二面の歴史を持つが、その中で翻弄され、辛酸な運命を背負わされたのは対馬の人々であった。このことは対馬の位置の多面性を物語る。

3. 周辺の遺跡（第1図）

峰町内の遺跡は、弥生時代後期の遺跡が圧倒的に多い。この状況は北部九州の動きと対応する。西面の三根湾一帯と隣町の豊玉町浅茅湾一帯は弥生時代後期、対馬の中心地であった。古墳時代、奈良時代と暫時対馬の中心地は南下する。日本に統一国家が誕生するとの同時移行の現象がみられる。町内の遺跡については、第1図の地図に示した。町内を東面と西面に分け代表的な遺跡について述べてみたい。まず、東面の遺跡についてみると、縄文中期～後期の佐賀貝塚（25）がある。昭和60年に発掘された遺跡は膨大な石器・骨角器を含み縄文人の広範な交流を物語るものとして注目をあびた。弥生中期～後期の遺跡としては、小姓島遺跡（29）、瓦質土器・把頭飾が出土。椎の浦遺跡（19）、細形銅劍・銅鏡出土などがある。対馬の遺跡（墳墓）は海に面した小高い赤土状の台地にあり、半たい石を箱式に組んだ箱式石棺に代表される。椎の浦遺跡は2基の壇棺と5基の石棺からなり発掘当時の現状を維持している。

西面、国道382号線と平行に流れる吉田川下流域に、縄文中期と縄文後期終末にいたる吉田貝塚（14）がある。中期からは阿高式土器、後期終末からは夜白式・板付I式土器が出土している。井手遺跡（7）は三根湾を含む三根地区内でもっとも古い遺跡である。縄文晩期の凸帶文系土器・弥生式・朝鮮系無文土器の他に抉人石斧、多数の青銅製品が出土している。三根川下流域には、サカドウ遺跡（6）青銅製品等、高松塙遺跡青銅製品・石斧・土器、下ガヤノキ遺跡（4）青銅製品・石剣等、考古学上著名な遺跡がある。三根湾湾口部の北に木坂部落があり、昭和50年に木坂海神社前的小高い丘から遺跡が発見された。7基の石棺墓と墓道からなり、副葬品として多数の青銅製品が発掘された。木坂遺跡の発掘に前後して、三根湾の支浦、吉田浦の河口から下流域にかけて、重要な遺跡の発掘が相次いだ。恵比須山遺跡は13基の石棺墓が発掘され、中でも青銅製の把頭飾は緻密精巧な造りで、他の青銅製品を圧倒するものであった。恵比須山遺跡から川を隔てて直ぐに小高い丘があり、丘上にトウトゴ山遺跡がある。素顛頭太刀が出土した。下流域では吉田貝塚から国道と吉田川を挟んで、大田原遺跡と大田原丘遺跡がある。後者からは有柄式磨製石剣が出土した。

III. 調査

1. 調査の概要（第2図）

調査は大田原が水田地帯であり、遺跡が農道上に位置していたので、田植が終わるのを待ち平成4年6月22日から同4年7月16日の期間行った。

発掘調査前の遺跡の状況は工事車両等により、表土が堅く締まった状態になっており、手掘りによる作業は困難だったので、あらかじめ表土から30cm程を機械で掘り下げるにした。調査対象区域は、農道の最小幅員が4mだったので、トレーンチ最大幅を3.5m、長さを16mに設定、山側をトレーンチW(2m)、水田側をトレーンチE(1.5m)に分け、横割りは4区(4m)に分割した。トレーンチWの調査に2週間を費やした。幅2m、深さ2m、長さ16mの壇塚様の調査壇は炎天下辛い発掘調査となった。トレーンチEの発掘調査は雨により充分な成果をあげることができなかった。動力ポンプとバケツによる雨水の汲み出しと土壁の崩落の兆しがみられたので慎重な作業を要した。調査終了を待たずして土壁の全面崩落がおこり、調査は不可能となつた。調査期日も迫っていたので、この時点で調査を終了した。トレーンチWの土層断面はとることができたが、トレーンチEの土層はとることができなかつた。

尚、平成4年3月4日から同4年3月8日の期間行った試掘調査壇は、山裾を拓いた畑地の下に位置し、工事設計上、家庭排水を通す暗渠を掘ることになつていて、試掘壇を設定した。本書では第5区として報告している。

2. 土層（第3図）

土層図は本調査区の西壁及び試掘壇について作成した。農道工事道路補強のため、調査区にはかなりの覆土が運び込まれていたが、覆土については地層として扱わなかつた。全体的にみて、土層の状態は極端な乱れもなく、比較的フラットな堆積であるといえる。本調査区の土層は基本的には5層で、各層位の状態は次の通りである。

1層 本来の表土である。調査の概要で述べたように、30cmほどを（覆土）機械掘りした。

土層は淡灰色粘質土層で木片、金属等が混じっていた。4区で1層はされる。

2層 比較的安定した土層である。浅くて40cm、深くて75cmに達する。1区は淡褐色粘質土層、2区では大型の礫が混じる、淡褐色大礫粘質土層。3・4区は淡褐色粘質土層で、全区から土器の出土がみられる。

3層 1区から2区にかけて黒褐色粘質の貝塚をふくむ。貝塚層の下は暗褐色粘質土層で、2区の半ばで暫時消滅していき、2区から4区まで新たな土層、淡褐色粘質小礫土層に変わる。3層本来の色層は淡褐色と思われる。貝塚層下の色層の変化は炭化物をふ

第2図 大田原ヤモト遺跡位置図およびグリッド配置図



- くむ黒褐色粘質土層の成分がしみ混んだ為の変化と思われる。3層は焼土が2区から3区にまたがった部分と4区にのこる。1、2区の貝塚層及びその下層からは、貝殻類のほか獸骨、石鍋片、鉄矢尻、土器等が出土している。
- 4層 指頭大の円礫が混入する、暗褐色砂礫層である。粘質性はなくバサバサしている。弥生式土器が出土する。
- 5層 明黄褐色土層（地山）で出土遺物は少なくなる。今回の調査における最下層である。

試掘場は西壁と北壁について図示する。西壁は山裾を拓いた畠地の下になる。

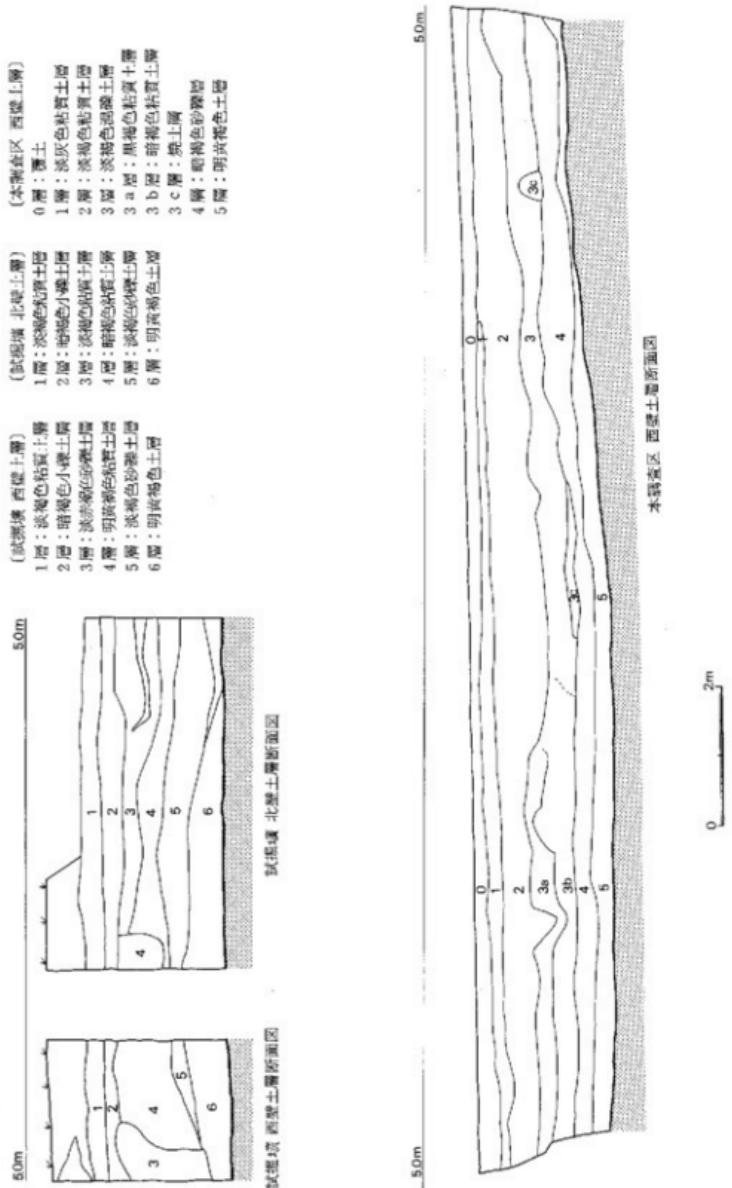
〔西壁土層〕

- 1層 淡褐色粘質土層、わずかに砂礫が混じる。
- 2層 暗褐色小礫土層、土器の出土。
- 3層 淡赤褐色砂礫土層（地肌）。
- 4層 明黄褐色粘質土層（地肌）。
- 5層 淡褐色砂礫上層。
- 6層 明黄褐色土層。

〔北壁土層〕

- 1層 淡褐色粘質土層、木切れ等が混じる。
- 2層 暗褐色小礫土層、土器の出土。
- 3層 淡褐色粘質土層、水分を含み粘りのある炭化物が堆積する。
- 4層 暗褐色粘質土層。
- 5層 淡褐色砂礫土層、3層と同様の炭化物がかなり厚く堆積している。
- 6層 明黄褐色土層、5層の炭化物の下に滑り込む。

土層図のレベルは道路上ほとんど平坦だったので、すべて海拔5.00mに統一した。



3. 出土遺物

(1) 弥生時代（第4・5・6図）

朝鮮系無文土器（1～3）

日本では北部九州を中心に、弥生前期末から中期後半にかけて朝鮮系無文土器が出現する。同じ土師質ながら朝鮮系無文土器と、弥生土器の相違点は土器を製作する際の回転台の使用的有無と口縁部成形法の違いにある。弥生土器において、全体の均整が整っているのは粘土紐で輪積み形成を行う際、回転台を用いたからであり、これに対し朝鮮系無文土器は土器成形において、粘土紐輪積み法は同じだが、手で保持しながら成形を行ったものである。それ故土器の均整が不整となる。次に最も特徴的なのが口縁部の成形の違いである。弥生土器の場合、粘土紐でつくる口縁部は器体との接合部位を上下からヨコナデし痕跡を消してしまう。それに対し、朝鮮系無文土器は口縁部をつくる粘土紐を器体を取り付ける際、先ず器体に擬似口縁を作り、その外に粘土紐をとりつけ、擬似口縁で巻き込む。その際、指で押さえつけながら巻き込むので指頭圧痕がのこる。

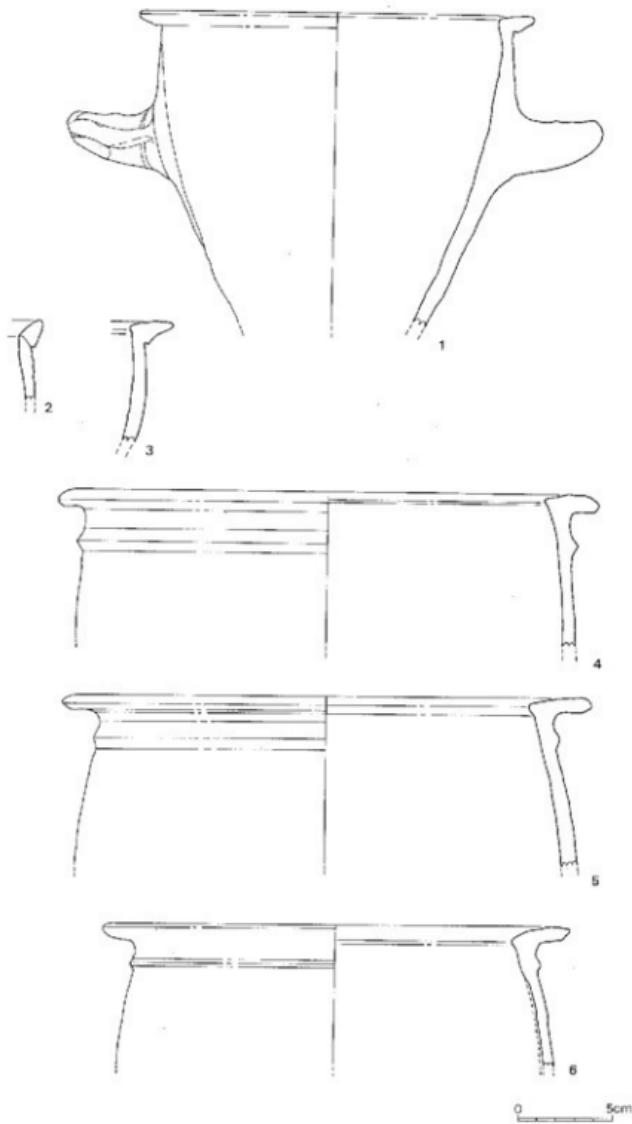
1. 把手付壺片（5区5層）試掘出土。復元口径20.9cm。口縁部は擬似口縁部と貼り付けの口縁部からなる。わずかに内傾しつつ伸びた胴部に嘴状の擬似口縁部をつくり、口縁端を丸く整えた三角形の口縁部を貼りめぐらす。貼りつけた口縁下部に指頭圧痕がみられる。器壁は内外とも砂岩状の感触を呈する。調整については不明。この壺片は排水口の下に埋もれていたので、水による器表の磨耗が行われたかもしれない。牛角把手を取り付けた内壁には把手を取り付ける際の割当痕がみられる。牛角部分の調整は行われず、指圧痕がのこる。胎土には石英粒、白砂粒を多く含む。色調は淡赤褐色に一部灰白色。焼成は良好。

2. 粘土帶壺片（4区4層）。やや直立した口縁部は擬似口縁部と貼りつけ口縁部とからなり、口縁端は丸く整える。口縁下部には指頭圧痕が残る。胎土は白砂粒を含み、器壁外側はナデ調整、色調は淡茶褐色。内側は木片先端によるヨコナデ調整、色調は黒褐色。焼成は堅緻。

3. 粘土帶壺片（5区排土探）試掘出土。やや上向きの三角形底状の口縁部は擬似及び貼りつけ口縁部からなると思われるが判別出来ない。口縁端は丸く整え、口縁下部に指頭圧痕がのこる。胎土は石英粒、白砂粒を含む。器壁外側には斜平行に走るタキ痕がみられ、頸部でヨコナデ調整が行われている。内側はナデによる調整。色調は外側で淡赤褐色、内側は淡灰色。焼成は良好。

菱形土器（4～6）

4.（5区5層）復元口径28.6cm。ほぼ真直ぐに伸びた胴部に外へ直角に折れ曲がった口縁部がつく。口縁端は丸く整える。口縁部下に一条の三角突帯を貼り巡らす。胴外側は口縁部でヨ



第4図 弥生時代遺物実測図① (S = 1 / 3)

コナデ、胴部はナデ調整、色調は淡黒褐色。胴内側はナデ調整、色調は淡赤褐色。胎土はやや荒い白砂粒を含む。焼成は良好。

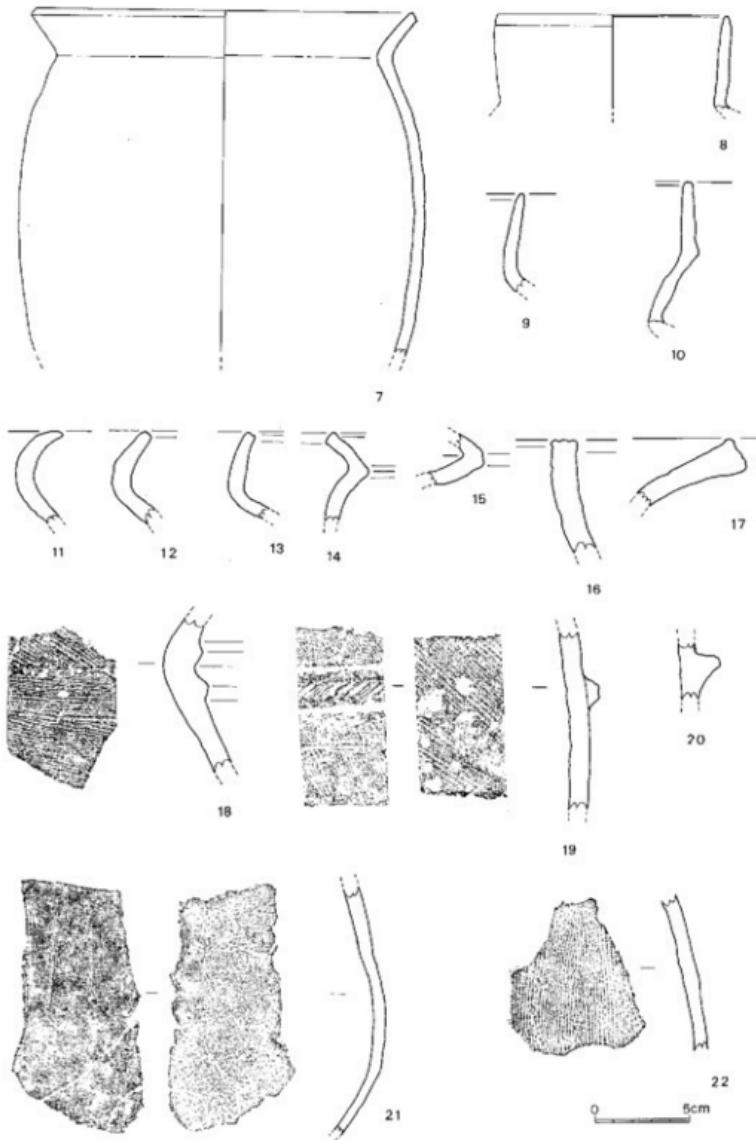
5. (1区5層)復元口径27.9cm。4より内傾しつつ伸びた胴部に直角にわたる口縁部が付く。口縁端は外側を丸く整え、内側はわずかに尖り気味である。口縁下部に一条の三角突帯を貼り巡らす。口縁部外側はヨコナデ刷毛目、胴部もヨコナデにし刷毛目で調整。色調は淡茶褐色、焼成時の黒色変化が一部にみられる。胴内側はヨコナデ、色調は明茶褐色。胎土には少量の砂粒を含む。焼成は堅緻。

6. (1区6層)復原口径24.8cm。5より更に内傾しつつ伸びた胴部に直角にやや上向の口縁部が付く。口縁端は外側は小さく丸く整え、内側は大きく水平に整える。口縁下部に一条の三角突帯を貼り巡らす。胴外側はヨコナデ調整、色調は赤褐色。胴内側はヨコナデ、壁面一部剥落、色調は赤褐色。胎土には多量の砂粒を含む。焼成はやや良。4, 5, 6とも弥生中期後半に位置づけられよう。

土器口縁部（7～17）

7. (2区5層)復元口径20.5cm。卵形の胴体に「く」の字に折れ曲がった口縁部を持つ。口縁端は水平に整える。口縁部内外及び胴部内外面とともにナデ調整。色調は内外面ともに茶褐色、一部焼成時の黒色変化がみられる。胎土には石英粒、白砂粒を含む。焼成は良好。

8. (4区4層)復原口径12.2cm。口縁部はほぼ直立する。口縁端は口縁部の内外を押せながら丸く整える。口縁部外側はナデ調整、内側はヘラ調整。色調は内外ともに黒褐色、胎土にはやや大きい石英粒が混じるが器表にはあらわれず焼成は堅緻。9の口縁端は内側から押りながら丸く整える。内外ともにナデ調整、色調は淡桃白色。胎土には白砂粒が混じり、焼成は良好。10の口縁端は丸く整える。口縁部と頸部の境に一条の三角突帯を貼り巡らす。内外ともナデ調整。色調は淡褐色、一部焼成により黒色に変化。胎土には少々石英粒が混じる。焼成は良好。11、「く」の字の口縁部に口縁端は丸く整える。口縁部は内外面ともナデ調整、頸部よりタテの刷毛目調整、内側は平行弧線の刷毛目。色調は内外とも淡黄褐色。胎土にわずかに白砂粒を含む。焼成は堅緻。12、「く」の字の口縁部に口縁端は水平に整える。口縁部内外ともにナデ調整。胎土に多量の黒雲母をふくむ。淡黄褐色、焼成は良。13、口縁部は斜平行弧線の刷毛目で調整。口縁端は口縁部爪で盛り上がり水平に整え、一条の沈線を巡らす。内側はヨコナデ窓調整、胎土に白石粒を含む。色調は内外とも淡茶褐色。焼成は良。14、袋状口縁をなす壺形土器である。頸部は上方にひらき、肩曲部で稜を有し反転して口縁部をつくる。口縁端は口縁部爪がやや盛り上がって、水平に整える。胎土には多くの石英粒、白石粒を含み、器表は荒れている。色調は淡黄褐色、焼成はやや良。15、袋状口縁をなす壺形土器である。14と比較して頸部から口縁部への反転が急である。内外ともヨコナデ刷毛目調整で赤褐色、胎土には金雲母、石英粒を含む。焼成は堅緻。16、大型壺の口縁部である。水平に整えた口縁端に二条の沈線



第5図 弥生時代遺物実測図② (S = 1 / 3)

をめぐらす。仕上げはヨコナデ、下部に刷毛目がのこる。胎土は石英粒を含む、焼成は堅微。
17. 外に大きく開いた大型壺の口縁部である。口縁端は水平に整え櫛用のもので櫛目をいれている。内外ともに刷毛目調整、色調は赤褐色、胎土にやや大きい石英粒を含む。焼成は堅微。
7～17は弥生後期、終末に位置づけられよう。

土器胴部（18～22）

18. 断面三角突帯を二条貼りめぐらした壺形土器片である。頸部と胸部からなる。外側は地肌が荒れ、胎土に含まれる石砂粒がみえる。内側の頸部と胸部の境に突帯がつき刷毛目を画する。色調は外側で淡赤褐色内側は淡黄褐色、焼成は良。19. 壺形土器の胴部で断面台形の突帯をめぐらす。突帯には櫛描紋を施す。内外ともに刷毛目仕上げ。内側器壁一部剥落、胎土はやや大きめの石英粒を含む。焼成は良。20. 断面三角突帯を貼りめぐらした、壺形土器片である。胎土にはやや大きめの石英粒、長石粒を含む。焼成は良。21. 胴の張りがやや下に位置する。頸部に近い部分はタテの刷毛目調整で一部ナデ消しがみられる。胴部から底部に至る部分はヨコナデ刷毛目調整、内側はタテナデ刷毛目調整で、一部補強した箇所はヨコナデ刷毛目調整となる。色調は淡茶褐色、内側は黒褐色となる。胎土は石砂粒が混じる。焼成は良。22. タテの刷毛目調整。淡赤褐色、一部焼成時の変化がみられる。内側はナデ調整で色調は淡黒褐色。胎土は長石粒、石英粒を含み、焼成は良好。

土器底部（23～27）

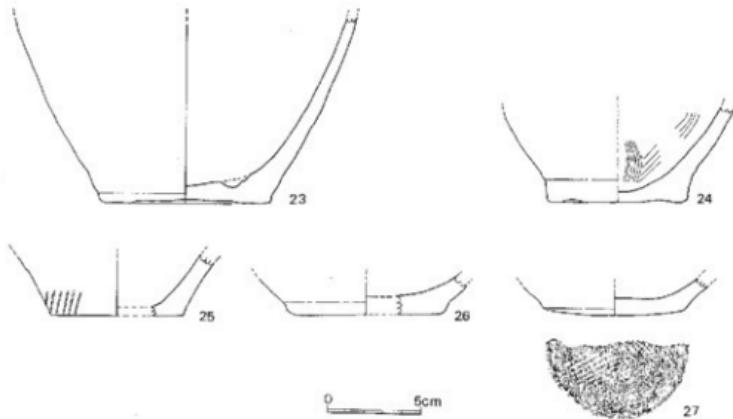
壺形土器の底部（23、24、25）壺形土器の底部（26、27）がある。23は若干上がり気味の平底である。外側は刷毛目がのこる。内側底部は剥落大粒の石英がみえる。ナデ調整。色調は外側で淡黄褐色、内側で茶褐色、焼成は良。24. 外側は一部刷毛目がのこるがナデ調整。内側には刷毛目がのこり、一部焼成時の変化がみられる。胎土には白石粒が混じる。焼成は良灯。25. 外側に刷毛目がのこる。内側はナデ調整、胎土には石英粒、白石粒を含む。焼成は良。26. 壺形土器の底部かと思われる。内外ともに刷毛目がのこる。胎土には白砂粒、石英粒を含み、焼成は良好。27. 丸底の安定を欠く底部である。外側底部に刷毛目を残し、内側はナデ調整。色調は外側で淡黄褐色、内側は淡灰褐色、胎土には白砂粒を含む。焼成は良好。8～27までは弥生後期～終末に位置づけられると思われる。

(2) 古墳時代

1) 土器（第7図）

高坏（1～6）

1～6は高坏である。1・2は杯部の下半部分で、杯の内面底部は平坦になる。1は脚部との接合部分に充填された粘土が残る。胎土に1mm大の砂粒が目立ち、粗い感じである。2は杯体部との境にゆるい段がつく。胎土は1に比べると良質で、目立つ砂粒は少ない。1・2ともにW-4区の第5層出土で、5世紀代のものか。3～6は高坏の脚部である。3は短い脚部が杯部のつけね付近から内湾しつつ大きく開く。脚柱部内には杯底部から充填された粘土が残り、他の部分は削られる。胎土には2～3mm大の長石が多く含まれ、あまり精練されていない。色調は杯底部内面が淡橙褐色以外はすべて淡黒灰色で、瓦質のような感じである。焼成は土器としては堅微で良好である。E-3区の第4層出土で、5世紀代のものか。4はわりと長い脚柱部がエンタシス状に中膨らみになるものである。全体をハケで調整したのち、脚柱部外面はナデを施す。脚柱部にのみハケ目は残る。内面はヘラ削りを行い、杯部との接合部分も円錐状に削り取る。胎土に1～3mm大の砂粒を含む他、金色ウンモも混入する。色調は明橙褐色で、焼成は良好である。4世紀代のものか。W-4区の第5層出土である。5は杯底部の内面が平坦で、ここから脚部への粘土の充填は見られない。脚柱部はやや内湾気味に開く傾向がうかがえる。内面はヘラ削りを施す。胎土にあざき色の砂粒が含まれる。色調は赤褐色で、焼成は良好。W-3区第5層出土である。6は脚柱部から肩曲して外方にひろがった脚部である。ただし脚柱部との境に明瞭な棱は見られない。調整は内外面ともナデ。胎土には微細な金色ウ



第6図 弥生時代遺物実測図③ (S = 1 / 3)

ンモが混入し、焼成は良好である。4～5世紀代のものか。E-1区第5層出土である。

甕 (7～12)

7～12は甕である。7は胴部からくの字形に外反する口縁部で、端部は玉縁状に丸く肥厚する。口縁部内面と胸部の境の稜は不明瞭だが、口縁部内外面にナデ調整を施した際の痕跡が明瞭に残っているため区別はできる。胎土には1～2mm大の砂粒の他、金色ウンモや角閃石が含まれる。色調は淡橙褐色で、焼成は良好。8は丸味をもつ胴部が上部ですばまり、そこからゆるやかに外反する口縁部がつくものである。復元口径13.9cm。口縁端部はわりと鋭く、口縁部内面の稜は明瞭につく。胴部外面と口縁部内外面はハケ調整後ナデを施す。特に口縁部は丁寧にハケをナデ消している。胴部内面はヘラ削りである。胎土は幾分砂粒が見られるものの精良で、焼成は良好。色調は赤褐色を呈する。W-3区第4層出土である。9はやや張りのある胴部からゆるやかに外反する口縁部がつく。復元口径19.2cm。口縁端部は丸く仕上がり、口縁部と胴部との境は不明瞭である。胴部は器壁が厚くボッタリとした感じで、内面のヘラ削りも中途半端である。他の部分の調整は摩滅のため不明だが、ナデかと思われる。胎土には1～3mm大の砂粒がかなり多く含まれ、金色ウンモの混入も目立つ。色調は橙褐色で、焼成は良好。全体につくりが粗雑である。7世紀代のものか。W-4区第3層出土である。10は9に似るが、やや丸味のある胴部にゆるく屈曲する「く」の字形の口縁部がつく。復元口径18.9cm。口縁端部は丸く、口縁部内面の稜はわりと明瞭である。口縁部は内外面ともナデを施し、胴部は外面がハケ調整で内面はヘラ削りを行う。胎土には1～2mm大の砂粒とともに金色ウンモの混入も見られる。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。W-2区第3層出土。11はほとんど張りのない胴部に弱く外反する口縁部がつく。復元口径15.8cm。口縁部内面の稜はわりと明瞭である。口縁部内外面はナデ、胴部は外面がハケ調整で内面はヘラ削りを行う。胎土には1～3mm大の砂粒を含み、金色ウンモもわずかだが見られる。色調は橙褐色で、焼成は良好。W-4区、第4層出土である。12もほとんど張りのない胴部から外方に屈曲する口縁部がつく。復元口径20.3cm。胴部は上半が直立気味で、下半は幾分すぼまる傾向をみせる。口縁部内面には稜が明瞭につく。器面調整は口縁部外面はナデ、内面には横方向のハケ目が残る。胴部外面はハケ調整、内面はヘラ削りと指押さえが併用されて器壁が薄く仕上がる。胎土には1～3mm大の砂粒が含まれ、金色ウンモも混入する。色調は外面が茶褐色、内面は淡褐色を呈する。W-6区出土である。

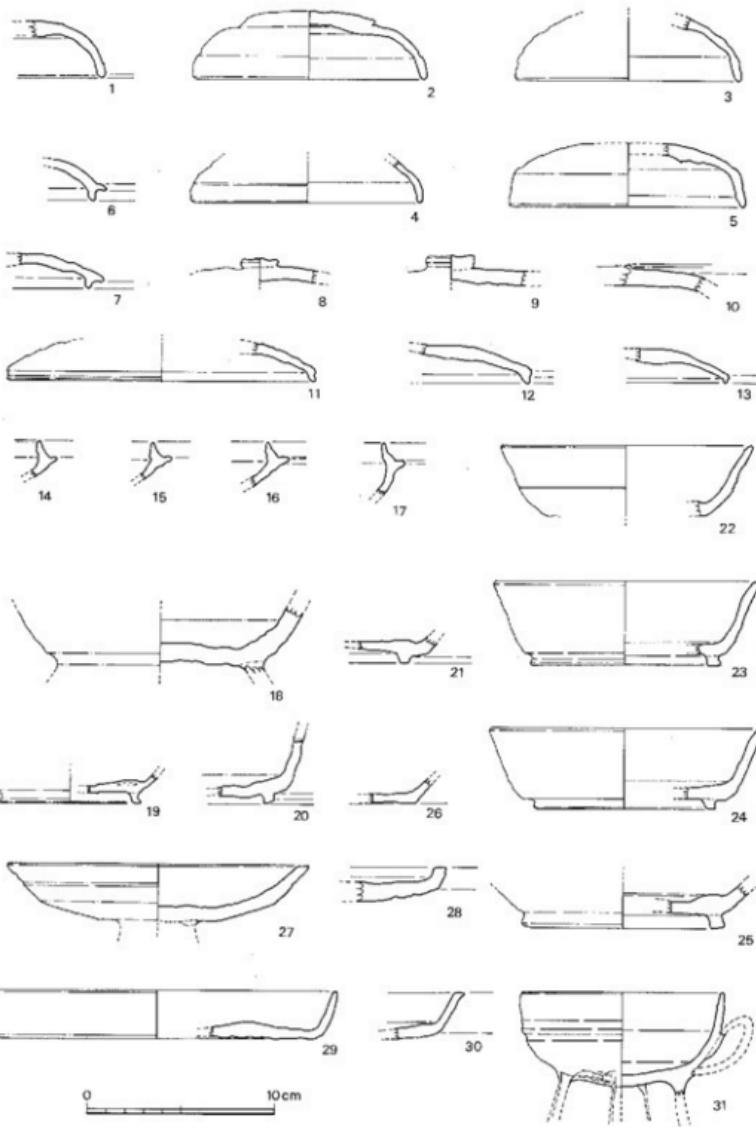


第7図 古墳時代遺物実測図① (S = 1 / 3)

2) 須恵器ほか(第8・9・10図)

杯蓋(1~13)

1~13は杯蓋である。見受けのかえりがつく以前のものと以後のものがある。1は天井部から口縁部にかけてなだらかなカーブを描いてつながり、口縁端部は丸くおさまる。天井部と口縁部との境に稜は見られない。天井部外面は回転ヘラ削りを施す。色調は灰白色で、焼成は良好。W-3区出土。2も天井部からゆるいカーブを描いて口縁部につながるが、天井部がヘラ切り離しのまま未調整で粘土が残っているものである。復元口径は12.4cm。天井部と口縁部の境は不明瞭で、口縁端部は丸く仕上がる。天井部内面には不整方向のナデを施す。胎土に2mm大の石英粒が目立つ。W-3区第3層出土。3は丸味をもった天井部から口縁部につながるものである。復元口径は12.0cm。天井部と口縁部との境は不明瞭で、浅く鈍い凹線が2条巡る程度である。口縁端部は丸くおさまる。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。W-4区出土。4も丸味をおびた天井部から口縁部につながるものだが、口縁部は直立気味に屈曲をみせる。復元口径12.2cm。天井部と口縁部との境は浅い沈線で区別される。胎土は精良で、色調は灰白色を呈し、焼成は良好。つくりが精緻で、陶質土器の可能性もある。E-3区第3層出土。5は比較的平らに近い天井部から、直立気味に屈曲して口縁部につながるものである。復元口径12.5cm、復元高3.4cm。天井部と口縁部の境は鈍い稜となる。口縁端部はわりと鋭く、端部内面はやや内傾して面をなすようだ。天井部は口縁部付近まで回転ヘラ削りを行う。胎土は2~3mm大の石英粒が見られるものの精良で、焼成は良好。色調は灰色を呈する。形態からみて陶質上器かと思われる。W-3区、第3層出土。6は杯身の可能性もあるが、立ち上がりが短いことから身受けのかえりと判断し杯蓋とした。丸い天井部にかえりをもつ口縁部がつく。内面のかえりは短く直下にのびるものである。胎土に長石粒が目立ち、焼成はやや甘い感じがする。色調は褐灰色を呈する。E-3区、第3層出土。7も見受けのかえりのつく杯蓋である。肩平な天井部がそのままのびて、かえりのつく口縁部となる。かえりは短いが、口縁端部より下方に出る。天井部は2/3程を回転ヘラ削りする。胎土には2mm大の石英粒が目立つ。焼成は良好である。W-1区出土。8は扁平なボタン状のつまみである。頂部がわずかに尖る。9は8より大きめのボタン状つまみである。天井部も平坦に近く、回転ヘラ削りが施される。胎土に1mm大の長石粒が目立つ。W-1区出土。10は器種不明だが、杯蓋天井部とした。天井部の中心付近に低い突起が巡り、口縁部にかけてゆるやかにのびる。器壁が厚く、胎土は緻密なあざき色で、焼成は堅緻。色調は外面が黒灰色を呈する。陶質土器の一種であろう。E-3区第4層出土。11は天井部がやや丸味をもち、口縁部は垂直に折り曲げられたものである。口縁端部外面はわずかに凹み、口縁部内面と体部との境は明瞭である。残存した破片では天井部のヘラ削りは見られない。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。W-1区第3層出土。12も11と同様に口縁部が垂直に折り曲げられ、口縁端部外面がやや凹むものである。ただ

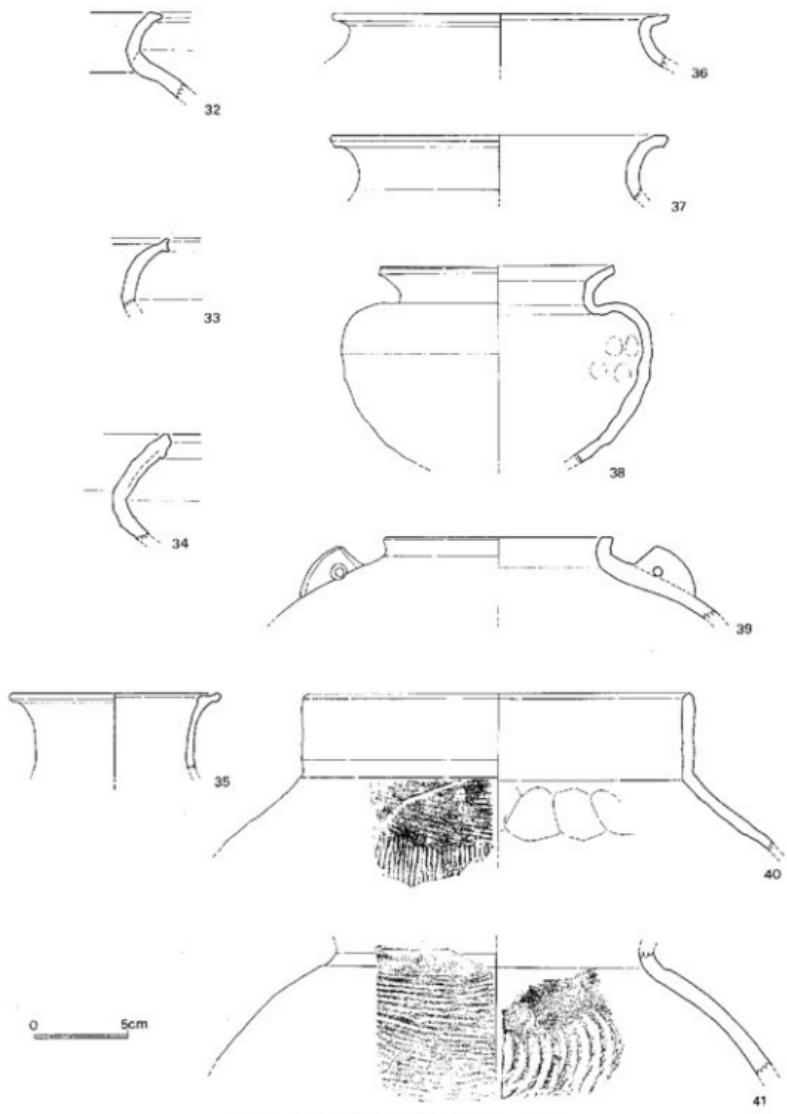


第8図 古墳時代遺物実測図② (S = 1 / 3)

し天井部は平坦で、15cmまでヘラ削りを行う。口縁部内面の稜は明瞭である。胎土・焼成ともに良好で、色調は灰白色を呈する。W-2区、第3a層出土。13は形態的に12に似るが、口縁部の丈が短く端部はやや内傾している。器壁も薄くつくられ、天井部は粘土を補充して厚みを増しているのがうかがえる。調整は天井部外面をヘラ削り、内面は不整方向のナデを施す。胎土・焼成とも良好で、色調は外面は灰白色だが、内面は全体に赤色顔料の塗布かと思われる付着が見られる。W-2区第3層出土。

杯身（14～26）

14～17は蓋受けのある杯身である。いずれも立ち上がりが短く内傾し、受部も水平方向にのびる。14は受部が短く、わずかにつく程度である。15は口縁端部が鋭く端正で、他は丸く仕上がる。16は胎土が粗く2～3mm大の石英粒が多く含まれ、焼成時の焼きぶくれも頗著にみられる。17は受部が体部から水平につまみ出されたもので、他のように受部と体部が直線的に連続しない。14・15・17は胎土・焼成ともに良質であるが、特に15は胎土に砂粒のない精良なものでつくりもていねいである。14・15はE-1区、16はE-4区、17はW-2区のいずれも第3層出土である。18～26は杯身である。18は底径も大きく、器壁も厚いことから別の器種の可能性もある。高台は外側に踏張るようなかたちで底端部につき、体部はやや内傾気味にのびる傾向をみせる。底部はヘラ切り離し未調整のままで高台接合部分にカキ目状の切れ込みを巡らし、高台がつけられた状態がうかがえる。胎土には1～3mm大の砂粒が目立つ。全体にボッテリとしたつくりになっている。W-1区第4層出土。19も底端部に高台のつくるものである。高台は細長く貧弱で、底部への接合も十分ではない。外端部が外側へ短くはねるようになっている。胎土は砂粒がほとんどない精良なもので、焼成は良好。器壁も薄く仕上がるが、高台接合部分にみられるようにつくりはやや雑である。W-1区第3層出土。20は高台が底端部よりやや内側につく。高台は断面四角形で、内端部が接地する。底部と体部との境は丸く不明瞭で、体部はほぼ直線的にのびる。胎土・焼成ともに良好である。W-1区第3層出土。21も高台が底端部よりやや内側につく。高台は断面方形で、前面で接地する。胎土は精良で、焼成も良好。ていねいなつくりである。W-2区第3層出土。22は杯体部のみの破片である。体部下半は丸味をおび、中位から上位にかけて外反気味にのびる。体部中位には一条の浅い沈線が巡る。口縁端部は丸く厚ぼったい。胎土は精良で、焼成も良好。ていねいなつくりである。W-4区、第4層出土。23は高台が底端部よりやや内側につく。復元口径14.0cm、器高4.5cm。底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的にのび上半部でやや外反する。口縁端部は丸く厚ぼったい。高台は断面四角形で前面で接地し、外端部が踏張るような屈曲をみせる。胎土は精良で、焼成は良好である。W-1区第3層出土。24も23とほぼ同様である。復元口径14.4cm、器高4.3cm。底部と体部の境は明瞭で、高台は底端部よりやや内側につく。高台は外端部が接地し、内端部はわずかに上がる。高台の接合は雑でやや不十分なところがある。体部はほぼ直線的にのび、口縁端



第9図 古墳時代遺物実測図③ (S = 1 / 3)

部は丸い。胎土・焼成ともに良好である。E-3区第3層出土。25は高台が底端部につき、内端部が接地する。高台は断面四角形を呈する厚くどっしりとしたもので、他の器種の可能性もある。胎土は砂粒が含まれるもののがね良好で、焼成も堅緻である。試掘の際に出土。26は高台のつかないものである。器壁が薄く仕上がり、底部も厚みがない。体部と底部との境は明瞭である。胎土に1mm程の砂粒が混入し、色調は灰白色で、焼成はやや甘い。硬質の土器のような感じである。E-4区第3層出土。

高杯（27・28）

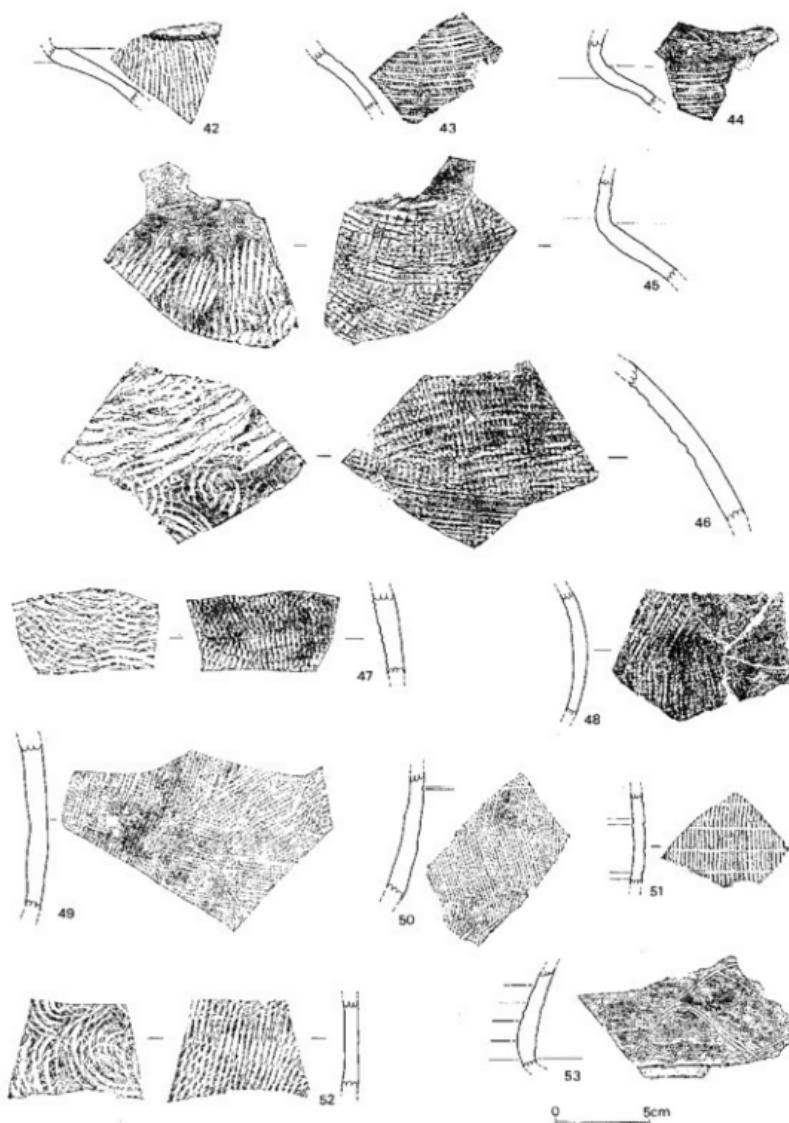
27は高杯の杯部である。復原口径15.9cm。杯は体部中位で屈曲し、口縁部にかけて外方に大きく開く。口縁部外面には明瞭に段がつき、口縁端部は鋸い。口縁端部内面はやや内傾する面をなし、杯部内面は底部までゆるやかにつながる。脚部の接合は杯底部の中心付近に放射状の切れ目を施して行われたことがわかる。調整は内面ナデ、底部は不整方向のナデ、外面には自然釉がかかる。胎土はほとんど砂粒が含まれない精良なもので、あざき色をしている。焼成は堅緻、色調は褐色を呈す。つくりからみて陶質土器であろう。W-2区第4層出土。28は器種不明。扁平なつくりで、高杯か盃の口縁部分であろう。体部から直角に折り曲げられて口縁部が形成される。口縁端部内面はやや内傾する面をなし、体部との境は明瞭である。体部外面には1条の鋸い沈線が巡る。全体に器壁が厚く、口縁部でも同様にボッテリとした感がある。胎土・焼成ともに良好である。W-1区第4層出土。

皿（29・30）

29は皿である。体部と底部の境が不明瞭で、体部はやや内傾してのびる。復元口径19.1cm、器高2.6cm。底部は回転ヘラ削りが行われ、内面はていねいなナデを施す。胎土には1~3mm大の砂粒が目立つ。W-4区出土。30も皿か。底部と体部の境は鈍い稜となり、体部は直線的にのびて口縁端部が短く外反する。口縁端部内面は平坦な面をなし、体部内面には自然釉がつく。底部のヘラ削りはみられない。胎土には2~3mm大の砂粒が目立つ。W-2区、第5層出土。

把手付脚台付椀（31）

31は把手付脚台付椀か。椀部分の復元口径は10.8cmを測る。椀は丸い底部から内湾してのびる体部につづく。体部中位には鈍い突帯が1条巡り、体部中位~下半にかけて断面長方形の扁平な把手がつく。底部は丸底に仕上げた後、ていねいなヘラ磨きが施される。椀は内面に自然釉がかかる。脚部は椀との接合後、方形の広い透しを4方向から穿つ。胎土・焼成ともに良好で、色調は黒灰色を呈する。E-4区第4層出土。



第10図 古墳時代遺物実測図④ (S = 1/3)

甕 (32~34)

32は甕の口縁部である。胴部に鋭く外反する口縁部がつけられる。口縁端部はさらに外方へつまみ出され、口唇部は外径する面となる。胎土には黒色の砂粒がみられる。焼成は良好、色調は灰白色を呈する。試掘の際に出土。33は大きく外反する甕の口縁部である。口縁端部は端正な面の形成を意識したのか上下端部それぞれにナデ調整を施した結果、シャープなつくりになっている。胎土は精良で焼成も良好、色調は黒灰色を呈する。W-3区第3層出土。34も口縁部が直線的に大きく外反するものである。口縁端部はわずかに下方へ折り返された格好で肥厚気味になる。口唇部は丸くならない。胴部は外面に横方向にハケ目風の痕跡がみられ、内面にはタタキ痕が残る。W-1区第2層出土。

甕 (35~40)

35は長頸甕か。復元口径11.2cm。直立気味の頸部がゆるやかにのびて直角に折れ、短い口縁部となる。口縁端部は丸く、内面はやや内傾する面をなして鎌先状口縁に似る。全体に器壁は薄い。胎土は精良で焼成は良好。色調は灰白褐色を呈する。瓦賀風の仕上がりである。36は甕の口縁部である。復元口径17.9cm。胴部から短く逆L字形に屈曲して口縁部となる。口縁端部は鋭く端正である。胴部外面にはタタキ目が残り、口縁部は内外面ともていねいなナデを施す。胎土には1mm大の砂粒の他、金色ウンモが混入する。焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。W-1区第4層出土。37は甕の口縁部か。大きく外反する口縁部は内端部が丸く仕上がり、外端部は稜のつくシャープなつくりになっている。胎土・焼成とともに良好。黒灰色を呈する。W-3区第3層出土。38は甕で、肩の張った胴部から逆コ字形に屈曲した口縁部がつく。復元口径12.4cm。口縁端部は鋭く、端正な仕上がりである。口縁部から胴肩部付近まではていねいなナデで器面調整が行われるが、胴部中位～下半はナデを施すも器面は凹凸が著しい。胎土は砂粒の含まれない精良なもので、あざき色を呈す。焼成は堅緻で、色調は黒灰褐色である。陶質土器と思われる。E-3区第4層出土。39は直口甕か。丸い胴部の肩部付近に小孔のある突起がつく。図は小破片から反転復元したもので、口径に多少の誤差はある。口縁部は胴部から短く直立ないしは若干外反する。外面は口縁部まで自然釉が付着し調整不明だが、内面は胴部のタタキ目がていねいにナデ消される。胎土は砂粒の無い精良なもので、焼成は堅緻である。色調は灰青色で、淡黄褐色の自然釉がかかる。W-1区第3層出土。40も直口甕である。口縁部はかなり長くほぼ直上に立ち上がり、胴部との境は浅く凹む。口縁端部は内傾して面をなす。復元口径20.2cm。胴部は肩が張らずにのびるようだ。調整は胴部外面が繩席文タタキ、胴部の上端付近と口縁部内面は粗い横ハケ、胴部内面にはケズリと粗い横ハケがみられる。胎土は精良で、色調は暗灰褐色、瓦質である。W-4区第5層出土。

壺腹部片（41～52）

41～52は壺の肩部片である。42以降の破片の傾きは任意に設定した。41は壺の肩ヒ半部である。外面は粗い平行タタキで、口縁部との境はナデてやや凹む。内面は円弧状にあて具痕が残る。胎土・焼成とともに良好で、暗灰色を呈す。W-3区第4層出土。42は外面に縦方向の平行タタキを施した後、沈線を巡らす。内面はナデ調整。胎土は精良で色調は灰白褐色、焼成も堅緻である。W-2区第3層出土。43は外面に浅いタタキを施した後、平行カキ目に入る。内面はナデ。色調は灰色で焼成がやや甘い。44は43と同一個体になると思われる。肩部外面のカキ目が口縁部との境にまでおよぶ。焼成がやや甘い。W-4区出土。45は外面に格子目タタキが、内面には粗い平行タタキが施される。口縁部にはタタキはおよばない。胎土・焼成とともに良好。46は肩部の中～上位であろう。外面は格子目タタキの後、粗いハケ状のものでナデて再調整を施す。内面は中位が同心円タタキで、上位はタタキのあて具痕が円弧状につく。胎土に大粒の砂粒を含む。47は外面が平行タタキで、内面は同心円タタキが青海波状につく。胎土は精良で、堅緻である。48は外面に格子目タタキを施す。焼成がやや甘く、淡褐灰色で瓦質に近い。49は外面が細い平行タタキで、内面はナデ調整。胎土・焼成とともに良好。E-3区、第4層出土。50は外面に繩文タタキを施した後、沈線を巡らす。内面はナデ調整。胎土に1～3mm大的石英粒が目立つ。焼成は堅緻で、色調は淡灰青色。51は外面の縱状文に4条の沈線が見られる。内面はていねいなナデ調整に加え、浅い沈線も巡る。胎土は精良で、焼成は良好。淡褐灰色を呈す。W-4区第4層出土。52は外面が平行タタキで内面が同心円タタキをおこなう。灰白褐色だが、胎土・焼成とともに良好。W-1区、第3a層出土。53は朝鮮製無釉陶器（註1）で、広口壺の口縁部片であろう。口縁部外面にヘラ描き波状沈線文が施される。調整は内外面ともヨコナデで、外面のヨコナデが平滑なのに対して内面のヨコナデは凹凸が著しい。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。色調は灰褐色で一見瓦質風だが、焼成は硬質である。W-4区第2層出土。

註1 朝鮮製無釉陶器の判定については赤司善彦氏の論文（「朝鮮製無釉陶器の流入—高麗期を中心として—」『九州歴史資料館研究論集16』1991）を参考にした。

(3) 製塙土器（第11・12図）

製塙土器の出土地層は第2層から第5層までの間、くまなく出土している。ことに第3・4層は須恵器（6～8C）につぎ製塙土器が多く、古墳時代の土師器も混じる。又この層は一部貝層となっており、獸骨等の他に石鍋片、有溝石錘（砂岩）、柳葉形鏡などが出土している。また焼土、灰なども確認できた。

第1類土器（1～6）

製塙土器の口縁部である。1～4は口縁端は丸く、5、6は水平に調整する。胎土は白砂粒等を多量に含む。焼成は堅緻。色調は5が黄褐色、他は茶褐色。

第2類土器（7～17）

製塙土器の頸部である。10、16は叩き締めを2度行う。1回目の叩き締めは器体の主軸に平行し綫にとり、2回目は1回目の叩き締めより、3～5cm下方から器体の主軸に直行し横にとる。器壁内側の叩き締めは8では平行曲線、10はわずかに弧線を描く平行弧線となる。他の土器の叩き締めは土器の主軸に対し平行にとる。8、15は叩き板の木目が顯れ、擬似格子文となる。10の色調は器壁外側は紫灰色、内側は鮮やか赤褐色。内側には頸部直下と下方土器底に煤が付着する。焼成は堅緻。

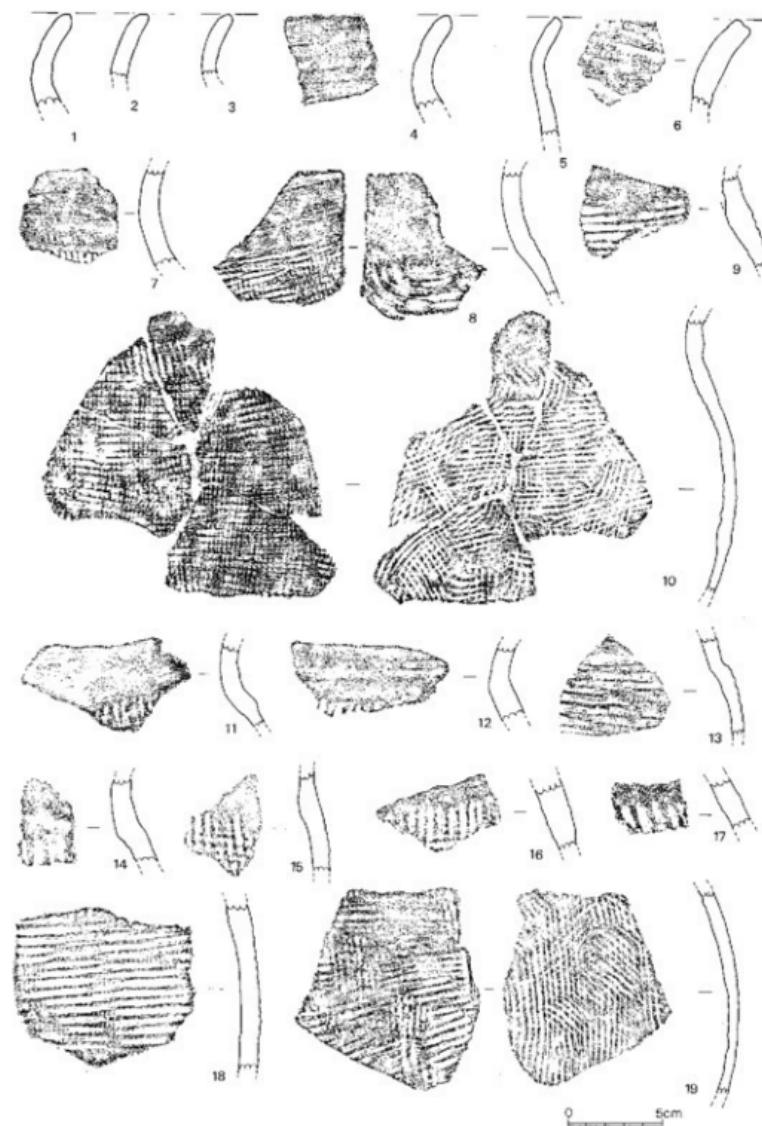
第3類土器（18～20）

頸部直下より胴部にいたる部分である。19は叩き目が斜めになる。内側は綫の平行弧線及び斜めの弧線。土器上端に煤付着。焼成は堅緻。色調は紫灰色。

第4類土器（第12図）

胴部の張り出し部分である。製塙土器の胴部の張り出しは比較的緩やかである。器壁の厚みは最大で15mm、最小で4mmに至る。平均して7mmから9mmになる。叩き目の違いによる器体の変化は見通す事が出来なかった。胎土焼成は堅緻。

対馬で確認された製塙土器は、横山浩一氏が「玄界灘式製塙土器（中）」（海の中道遺跡をめぐる諸問題）（註1）のなかで、志多留の万人塚遺跡出土の土器片はその可能性が高いと指摘されている。他に、昭和50年、まだ対馬で製塙土器が知られてなかった頃、吉田の女子高生が纏文式土器として「後山」で採集した土器片は玄界灘式タイプの製塙土器である。（註2）「後山」が吉田の何処にあたるのか、地元の人に聞いても判然としない。本遺跡の他にもまだ製塙土器の出てくる可能性は大いに残されているので、「後山」の地は是非探さなければならない。



第11図 製塩土器実測図① (S = 1 / 3)

「玄界灘式製塩土器」

玄界灘式製塩土器の名称（註3）については先にあげた、横山浩一氏の「玄界灘式製塩土器（上）」に倣った。以下要点と思われる部分を抜粋させてもらう。

1. 「本稿で取り上げる玄界灘式製塩土器（註3）は海の中道遺跡の調査（抜粋者註4）によってはじめてその用途を確認された土器である。この製塩土器は濃縮した鹹水を煮つめるための容器であって、形態上の顕著な特徴は、土師質でありながら、外面に須恵器に似た書き目を印することである。」
2. 「玄界灘式製塩土器が製塩土器であることを認知されるまで、九州で知られていた最も年代の新しい製塩土器は、古墳時代の大草式製塩土器であった。玄界灘式はそれよりも新しい奈良・平安時代の製塩土器である。」

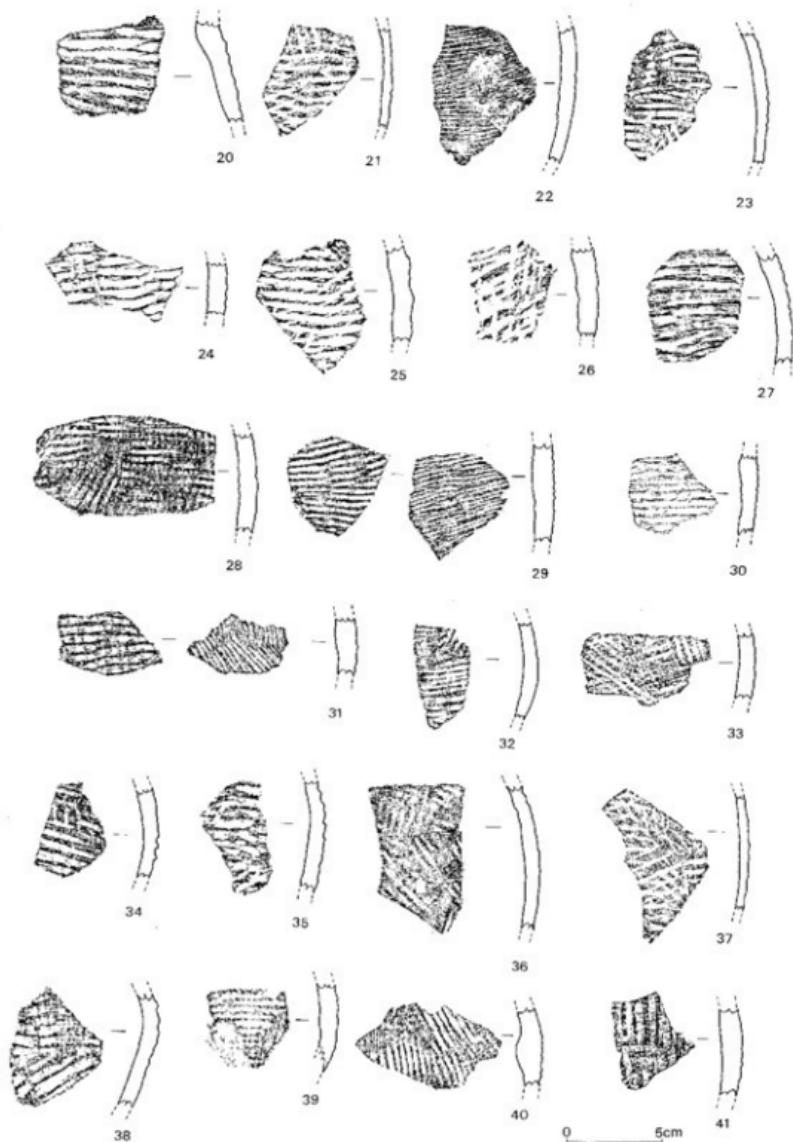
以上2点である。尚、大田原ヤモト遺跡出土の製塩土器は類型として玄界灘式製塩土器の範疇に入るとと思われる。

註1 九州文化史研究所紀要第29号 昭和59年3月刊

註2 対馬高校郷土社会部所蔵

註3 玄界灘式という広域地名を含んだ名称は必ずしも適切ではない。しかしみだりに名称を変更することはかえって混乱をまねくので、発掘中から使用しているこの名称を当分の間使い続けることにする。横山浩一氏註

註4 1978年から81年 福岡市教育委員会が発掘調査



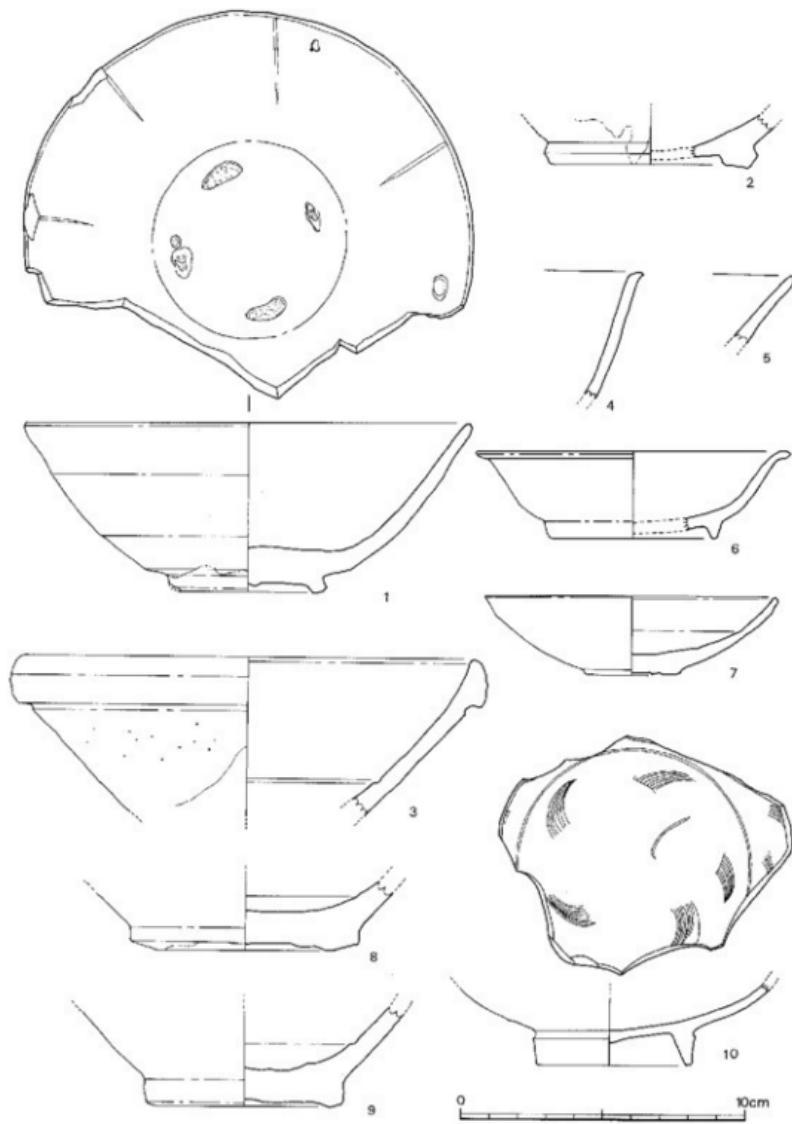
第12図 製塩土器実測図② (S = 1 / 3)

(4) 輸入陶磁器（第13・14・15・16図）

1) 中国産輸入陶磁器（1～21）

それ程多くはないが、中国産及び朝鮮産の輸入陶磁器の出土がある。中国産陶磁器の形式分類については、横田・森田分類に従った。

1は体部を1/3程度欠するが、底部も残り、完形に近い、越州窯系青磁碗である。底部はわずかに上げ底状で脛付部分は露胎である。体部の立ち上がり部は内湾するが、口縁部にかけて直線的に外に開く。内面には、白土による区分けが見られ、見込部には重ね継ぎ目跡が残る。釉は内外に厚くかけられ、黄緑色を呈し、全体に貫入が見られる。胎土は精緻である。口縁径15.5cm、器高5.8cm。2も越州窯青磁の底部である。内面には胎色の釉がかかるが、外側の体部下半と底にかけて釉はかかる。高台部分はシャープに削られている。復原底円径7cmを計る。3～10は白磁である。3はVI-2類にあたる玉縁口縁である。釉灰白色を呈し、体部外面の下には、施釉されない。内面見込の部分には沈線状の段を付いている。釉にはムラが見られ、粒状に済まっている。胎土には若干黒い粒子も見られるが精緻である。復原口縁径17cm。4は口縁部破片である。やや内湾気味の体部は口縁部を外反させ、端部は平坦で、外に向かって尖り気味におさめられている。釉はうすくかけられ、灰白色である。外面にわずかに釉の溜まりが見られる。形状からV-3に分類される。5は口縁端部は尖り気味におさめたV-1類で、仕上がりが雑である。6は小碗である。口縁は外につまみ出され、直下に沈線状に段がつく。釉は灰白色で光沢はなく全体に施釉されるが、高台脛付と内側はカキ落とされている。胎土は良好であるがやや精緻さを欠く。7はVI-6類皿である。底部はわずかに高台を残し、内側は輪状に削っているだけである。口縁は内湾しながら端部が丸くおさめられている。釉はうすくかけられ灰黄色で、体部下半には施釉されず、全体に貫入が見られる。内側見込の部分には沈線状の段を有する。復原口縁径10.4cm。8・9は胎土は粗く釉は灰色で、おそらくIV類底部である。8は高台が厚く、削り出しはわずかで脛付は内から外に向かって傾斜する。9は断面四角形の高台で、内側の釉は発色が悪く不純物を含み粗悪品である。両方とも内面見込部には段をもつ。10は細くて高い高台を有し、内面見込みに圓線を巡らす。また内面全体に柳で花文を描いている。釉は薄く灰色で高台部まで一部かかっている。底部口径5.4cm。11～19は龍泉窯系青磁である。11はI-2a類で内面に蓮華文を片彫し、口縁直下に圓線が巡る。口縁端部は丸くおさめられ、釉は厚くかけられ、くすんだ黄緑色を呈している。12・13は口縁部破片でI-2b類である。釉の発色はよく青緑色を呈している。口縁部は外側に直線的に伸び、端部はやや尖り気味に丸くおさめられている。14も同様であるが、体部に蓮華の葉を横から見た圓柄の部分である。15・16は体部及び底部に近いI-4類で、2本の沈線が体部を分割している部分である。14の外面にはケズリで生じた稜線が観察される。釉は内外とも厚くかかり貫入が見られる。色は緑色が強いが15はややくすんだ胎色である。17は胎土が黄褐色を呈しており釉も胎



第13図 輸入陶磁器実測図① ($S = 1/2$)

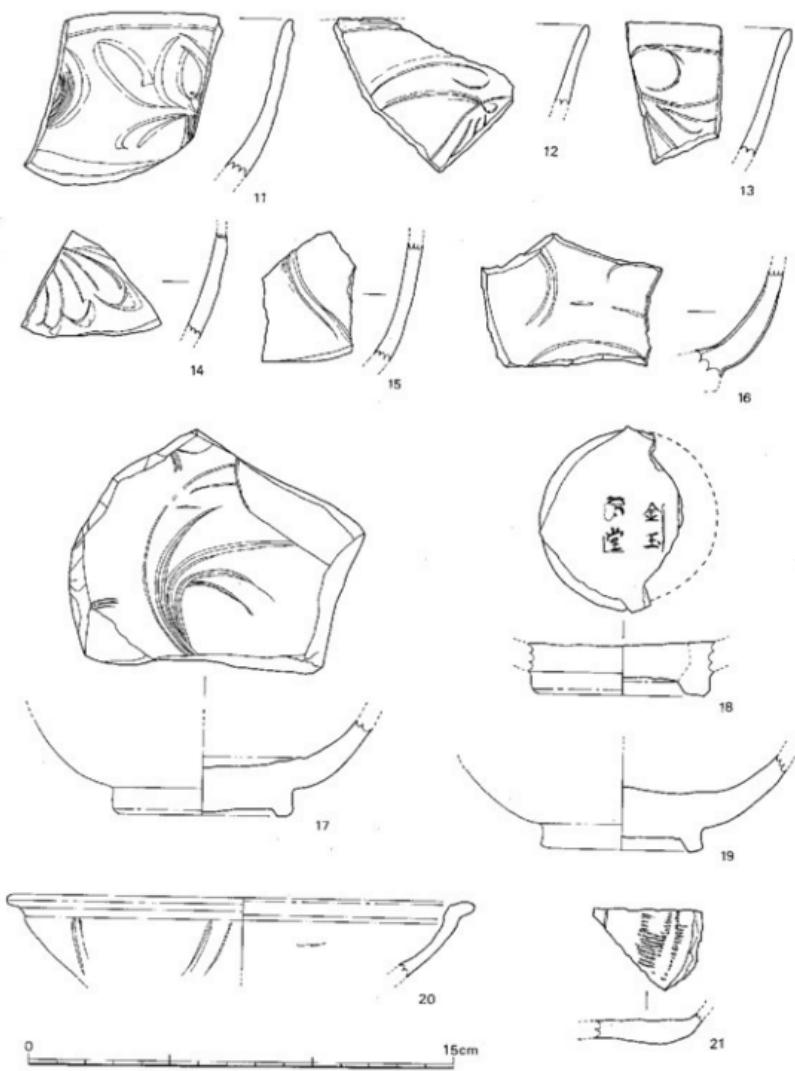
色をしている。高台は断面はほぼ四角形で、高台部疊付及びその内部は肧胎である。高台口径は6.4cm。I-4b類に属すると思われる。18は高台底の部分だけである。内底見込みに「金玉満堂」のスタンプが付されており、I-5d類である。釉は緑色で貫入が見られるが、外底見込みには釉はかけられていない。19は釉も厚くぼってりとしたI-4a類の底部である。わずかに残った体部に2本の沈線が見られる。釉は緑黄色で光沢もよい。高台口径6.2cm。20・21は同安窯系青磁である。20は内湾する体部から内側しつつ外方向に開く口縁部である。端部は丸くおさめられ、内部には沈線が1条巡る。外側はくびれ、体部には片彫の沈線が見られる。小片ではっきりしないがIV-1類に属するか。全体に貫入が見られ、灰緑色を呈している。21は底部小片である。内面に櫛によるジグザク文が施されている。外側は体部と見込みの境に段を有し、底部の釉はカキとられている。内外とも淡い緑色を呈している。

2) 朝鮮産輸入陶磁器 (22~27)

22は綫に稜のついた剖底状の青磁瓶で、草花文が綫に連なる。花弁を白象嵌、葉茎を細線で黒く描いている。器壁は厚く、ロクロ整形の跡が見られるが、内外に釉がかけられ、青緑色を呈している。胎土は精緻である。23は大形の青磁瓶の首から肩にかけての部分である。器壁は厚く精緻で、外側は印花が3段認められ、その下の肩の部分に4本の線を入れ白土をかけ象嵌されている。釉は灰緑色で渦った感の発色である。李朝初期か。24は青磁底部である。内面見込みに花弁をスタンプしただけと、それを囲む白土を象嵌しただけの円が描かれているが、釉は施されていない。外面には緑色の釉がかけられ、高台円側は釉がカキとられている。底は半分に割れ断面が観察できるが、内外面が赤褐色で真中は灰色を呈している。25は内面見込みに白色耐火土の目あとを4箇所有し、高台疊付の部分にも同じあと目が残る。釉は内外の全体にかかり、やや白く渦った緑灰色を呈す。表面には不純物が付着し粗さが感じられる。李朝期と思われる。26は小碗の口縁部である。外に平坦に開いた端部は尖り、「く」の字形にくびれ、体部は内湾している。全体に細かな貫入が見られ、白っぽいものが点々と入る。27は皿で外面の底部と体部を区分する弱い段があり、底はあげ底になっている。内面には見込みに沈線が巡り段がつく。釉は底を除く全体に緑黄色に発色し光沢もよいが、貫入が入る。全体に白渦感があり、ここでは26とともに朝鮮産として扱った。

3) 雜釉陶磁器 (28~30)

ここにあげた3点は外国産の陶磁器と思われるものである。28は壺口縁部で、非常に焼締められている。口縁は頸から「く」の字形に外に開き、端部は尖り気味に丸くおさめられている。直下に断面三角形の突帯が一条巡る。内面のほぼ全体と外面の一部に自然釉が黒くかかっている。復原口縁径17.6cm。29は底部分で、胴長の壺と考えられる。外側は横方向の叩き痕が残りその上に褐釉がかかる。朝鮮産か。また表面は黒・茶が混じるが、内側は暗褐色だけである。



第14図 輸入陶磁器実測図② (S = 1 / 2)

30は比較的うすい仕上がりの盤底部である。内面には灰釉がかかり、暗緑色を呈し、外側にもうすくかかり、底には自然釉の茶色の太い線が残る。復原底径は16.4cm。31、32は中国産陶磁器と思われる。

4) その他の土器 (31~37)

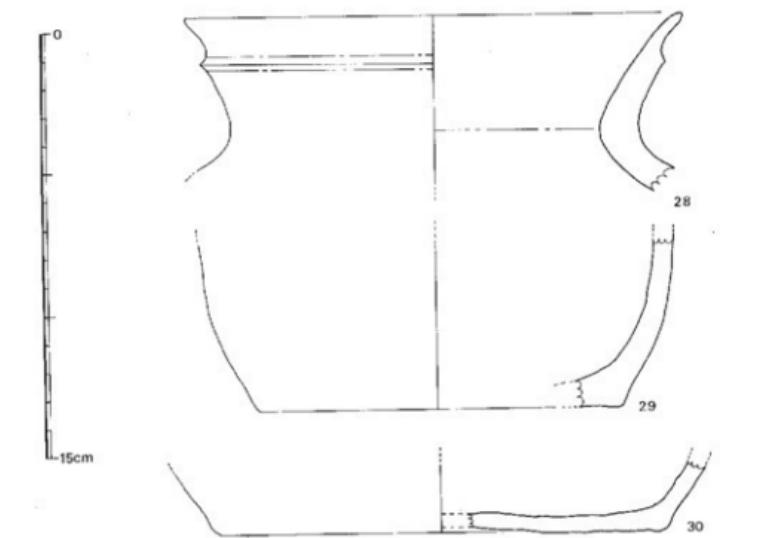
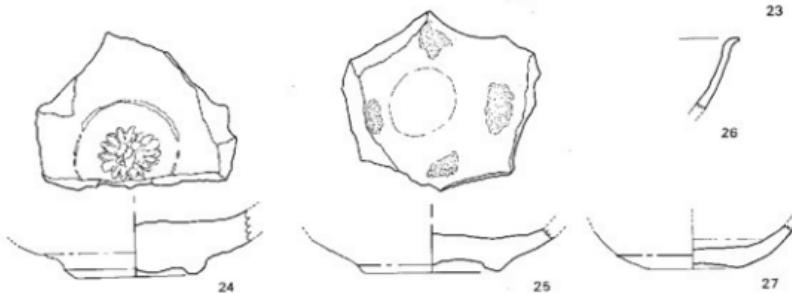
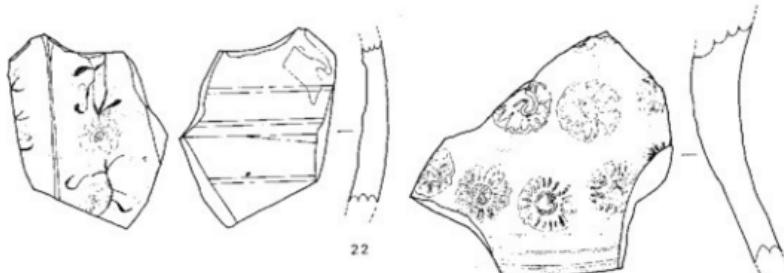
31は瓦質で外面はいぶし銀に、内面はヘラ磨きのあと黒色に塗られた、いわゆる瓦器黒色の高台付皿である。ロクロ成形された上にヘラ磨きされているが、外面はやや磨耗している。底中心には爪痕が円状に1条付されている。「九州系黒色土器」の器形の系譜では幾内系III類にあたり、9世紀ごろとみられる。復原口縁径15cm。32はロクロ仕上げの高台付碗であるが、立ち上がりから上の体部が欠失している。高台は貼り付けで、外に傾斜し断面三角形を呈する。胎土は精良であるが、表面は磨耗している。33は底部から体部下半までの破片で口縁部を欠くが、体部は外にラッパ状に開く。高台は断面三角形状に貼り付けられている。この胎土中には黒曜石の小破片が含まれており、対馬島で生産されたとは考えられず、九州本土部から運ばれた可能性が強い。34は壺底部片である。焼締められており、内面は茶褐色、外面は暗灰褐色を呈している。器表土は粒々状に自然釉がかかったようになり、底も不純物が付着している。全体の器形がはっきりしないが、中国製陶器の可能性も強い。35~37は火舎片である。35は上段に横子格子状のスタンプを押し、その下に突帯を2本2cm幅で入れ、間に円状のスタンプを付しているが、文様は判読できない。この下にさらに段が付くが、ここで欠失している。胎土は軟質で赤褐色、内面には一部刷毛目が見られる。器形は末広がりになる火舎下端部と思われる。36は平坦口縁が小さく外に張り出し、直下に渦巻文と円状突起をスタンプし、その下に長い「S」字状の型押しをしている。胎土は極めて精緻で金雲母を含み、暗褐色を呈している。37は瓦質で飾り高台が付き、上げ底である。立ち上がり部は幅1.5cmでくびれ、上下がふくらんでいる。底部内面にはやや粗い刷毛目痕が見られる。最下端部で復原口縁21.5cmを計る。

石鍋 (第16図)

38は滑石製石鍋の口縁部片である。黒い斑点が見られるが、材質は良好である。形状は比較的小形に属し、口縁直下の外側に幅1cm、断面三角形の鋸を有する。この他にも底に近い部分の小片が1点出土している。

九州と朝鮮半島との往来のルートにあたる対馬では、中世においても活発な交渉が続けられこの当時の輸入陶磁器が多いのも、その一つの現われである。輸入陶磁器には、中国産と朝鮮産が主流であるが、その中でも対馬においては朝鮮産が優位を保つようである。

現在知られているこれらの所在については、大きく2つに分けることができる。先ず神社等に奉納され、伝世品として知られるものである。この中で最初に挙げられるものは、町内木坂に所在する対馬国一の宮・海神神社に伝わる陶磁器類である。12~13世紀頃の青磁陰刻蓮華文



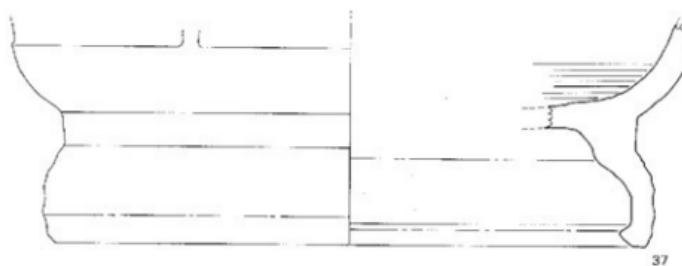
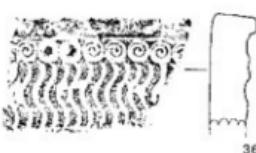
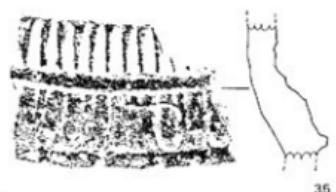
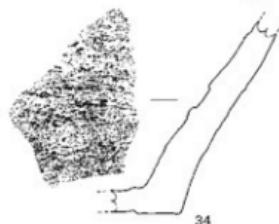
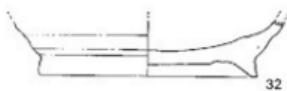
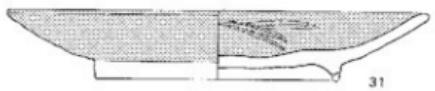
第15図 輸入陶磁器実測図① ($S = 1/2$)

梅瓶や青磁象嵌柳文瓶などの高麗青磁や、15世紀頃李朝期の粉青沙器象嵌唐草文瓶など多くが所蔵されている。また上県町佐護の神御魂神社にも高麗から李朝期にかけてのものが所蔵されている。

この他に発掘調査によるものがある。1990～1991年にかけて調査された海神神社弥勒堂跡の調査では、中国・朝鮮産陶磁器が多量に出土し、その多様さに目をひくものがあった。また豊玉町仁位の豊玉高校運動場整備中の出土や、上対馬町大増の朝日山遺跡などからも出土している。このように、どちらかといえば朝鮮産陶磁器の多さが特徴である。

本遺跡の陶磁器類から見た時代観は、第13図1・2に見られる11世紀頃の越州窯青磁から、同安窯系青磁に見られる14世紀中頃までの中国陶磁器と、第15図22の12・13世紀頃の高麗青磁および第15図23の14・15世紀頃の李朝青磁に求めることが出来る。

遺跡の立地は三根湾の奥深い所に位置し、天然の良港も兼ねていたと考えられ、遺物の出土から、大陸・朝鮮を通じての永い貿易交渉が行われていたことが窺われる。



0 15cm

第16図 その他の土器および石鍋 (S = 1 / 2)

(5) その他の遺物 (第17・18・19図)

黒曜石 (1) 5区より1点だけ出土。使用痕はない。

紡錘車 (2・3) 石製紡錘車が2点出土。1点は未完。1点は5区2層から出土。

土鍤 (4) 有孔土鍤。両端に孔を穿っていたと思われるが一端は欠損、漁網のおもりか。

鉄鎌 (5) 先端部を欠くが柳葉の形鐵鎌と思われる。貝層より出

土。

銅片 (6) 不明銅器。貝層より出土。

管玉 長さ10.7mm, 厚さ6.5mm。褐色を呈する。

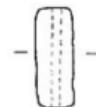
石斧 (1) 1点のみ出土。1区2層出土で蛇文岩製。

有溝石鍤 (2) 砂岩の疊上端部に縦1本・横2本の溝を有する。

長さ13.4cm, 厚さ5.5mm。2区5層より出土。

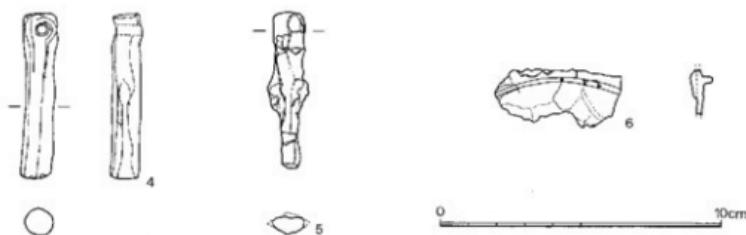
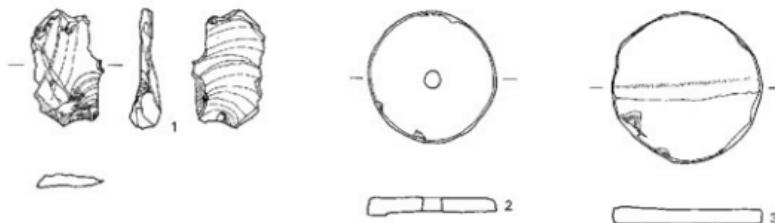
凹石 (3~8) 34点の凹石が出土している。一部を掲載する。

扁平ですわりの安定した凹石もあれば、安定を欠く綫長の凹石もある。出土上層はまちまちである。対馬ではかなり長い期間使用されていたと思われる。

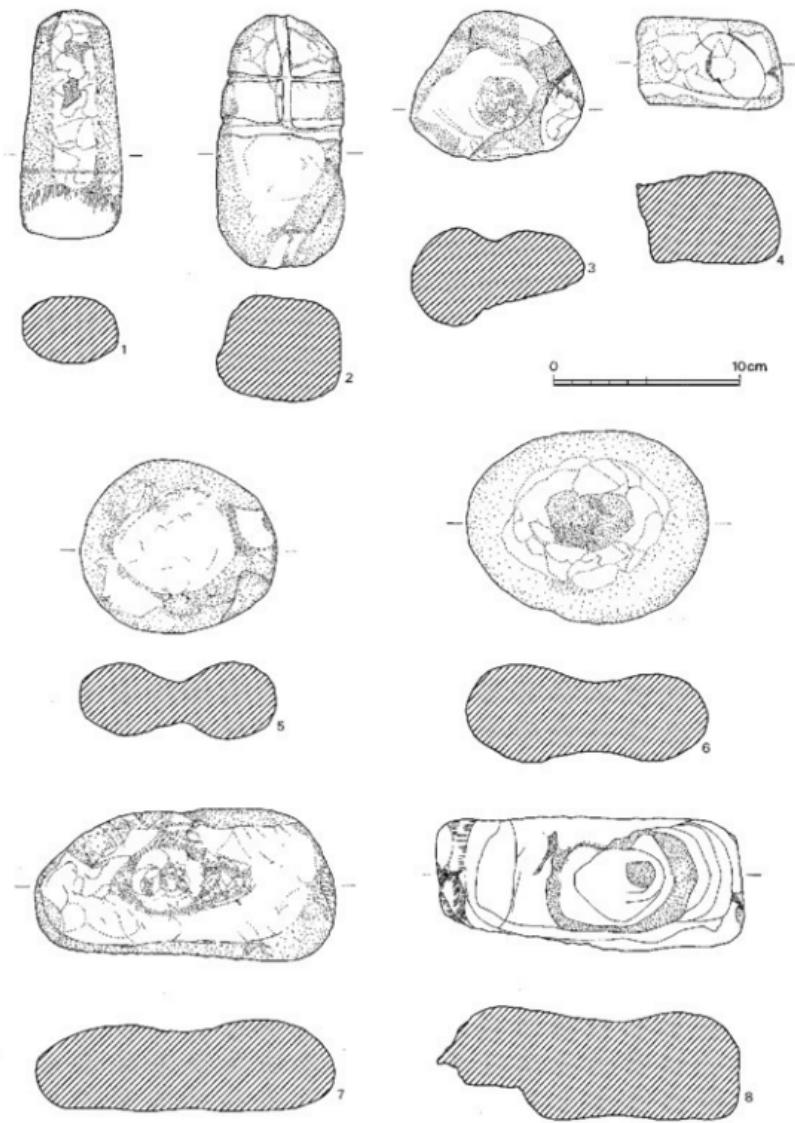


0 3cm

第17図 その他の遺物① (S = 1 / 1)



第18図 その他の遺物② (S = 1 / 2)



第19図 その他の遺物③ ($S = 1 / 3$)

IV. まとめ

全体に山がちな対馬にあって、河川が海へと注ぐ下流域一帯は唯一集落や田地が形成されうる場所であるといってよいだろう。大田原ヤモト遺跡の所在する峰町吉田地区は、まさにそのような条件の整った地域である。三根湾が南東に深く入りこんだ吉田浦には吉田川が注ぎ、その周辺に形成された集落には古くから数々の貴重な遺跡が所在する。吉田浦入口の白岳山や浦最奥部の神山の山頂にはそれぞれ銅矛が出土し、吉田浦に突き出た岬にはチゴノハナ遺跡、青銅製把頭飾の出土した恵比寿山遺跡、素環頭太刀の出土したトウトゴ山遺跡といった墳墓が形成されている。沿岸部では縄文中～晩期の吉田貝塚があり、大田原ヤモト遺跡のすぐ近くにも大田原遺跡や有柄式磨製石剣が出土した大田原丘遺跡がある。中世も曹洞宗普光寺に14世紀の高麗仏とされる銅造如来座像が安置され、宝篋印塔や吉田館跡といった遺跡も周囲には所在する。この他、式内社である天諸羽神社には鉢大明神の広鉢、今宮神社の銅剣が納められているという。

このような吉田地区の歴史的変遷は、まさに大田原ヤモト遺跡の概要そのものにも表れているといえるだろう。例えば、調査では弥生中期から中世までの遺物包含層が確認され、出土遺物の中には朝鮮系無文土器や陶質土器、朝鮮製無釉陶器や輸入陶磁器など朝鮮産の遺物がかなり見受けられた。地理的にも近い朝鮮とは継続的なつながりがあったことがうかがえる。

W-1～2区にかけては第3a層に良好な貝塚層が見られ、ミナ・アツビ等の多数の貝類に混じって獸骨片も出土した。同区の貝層部分では不整形な集石も見られたが、貝塚に伴う遺構かどうか判断することはできなかった。貝層からは、中世を中心に古墳時代の遺物まで出土している。また、出土遺物の中で注目すべき物として製塩土器があげられる。本県ではこれまで10例程が知られているが、対馬では上県郡上県町のシタル万人塚古墳の出土例しかない。ただしこれも混入品の可能性が高く、今回のようなまとまった数の出土は本県ではあまりない。本文中ほとんど触れられていなかったが、第4層の上面では調査区の敷力所で焼土や炭化物が見られた。周辺の石のいくつかは赤く焼けているものもあり、製塩が行われていた可能性も考えられる。1471年に作られた「海東諸国紀」には仇知只浦（朽木、吉田の古名）150余戸とあり、対馬の浦に住む人々は塩を焼き魚を取って生活していると記されている。時代を異にするとはいえ、製塩を行っていたことを示唆しており興味深い。

從来対馬の調査では墳墓等の埋葬関連遺跡は調査されることはあるが、今回のように集落のあり方が知れるような生活関連遺跡の調査はあまり行われていない。限られた期間と面積の中で十分な調査や結果報告がなされたとは決して思わないが、これから対馬の遺跡調査が目指すべき方向性を提起することになったのは確かである。本来なら調査担当の阿比留氏と「まとめ」を十分検討しなくてはならなかつたが、双方の連絡・調整がつかずこのような報告になつたことを深く反省する。最後に調査に御協力下さった皆様方に深く感謝申し上げます。

図 版

図版 1

遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（東から）



試掘墳土層断面



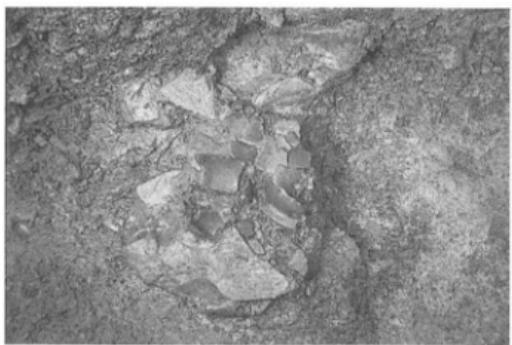
图版 2



本調查区西壁土層断面



遺物出土状況



遺物出土状況

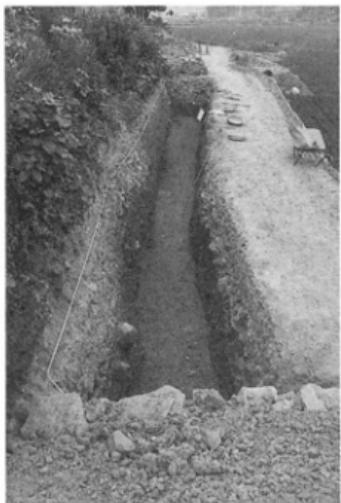
図版 3



調査風景

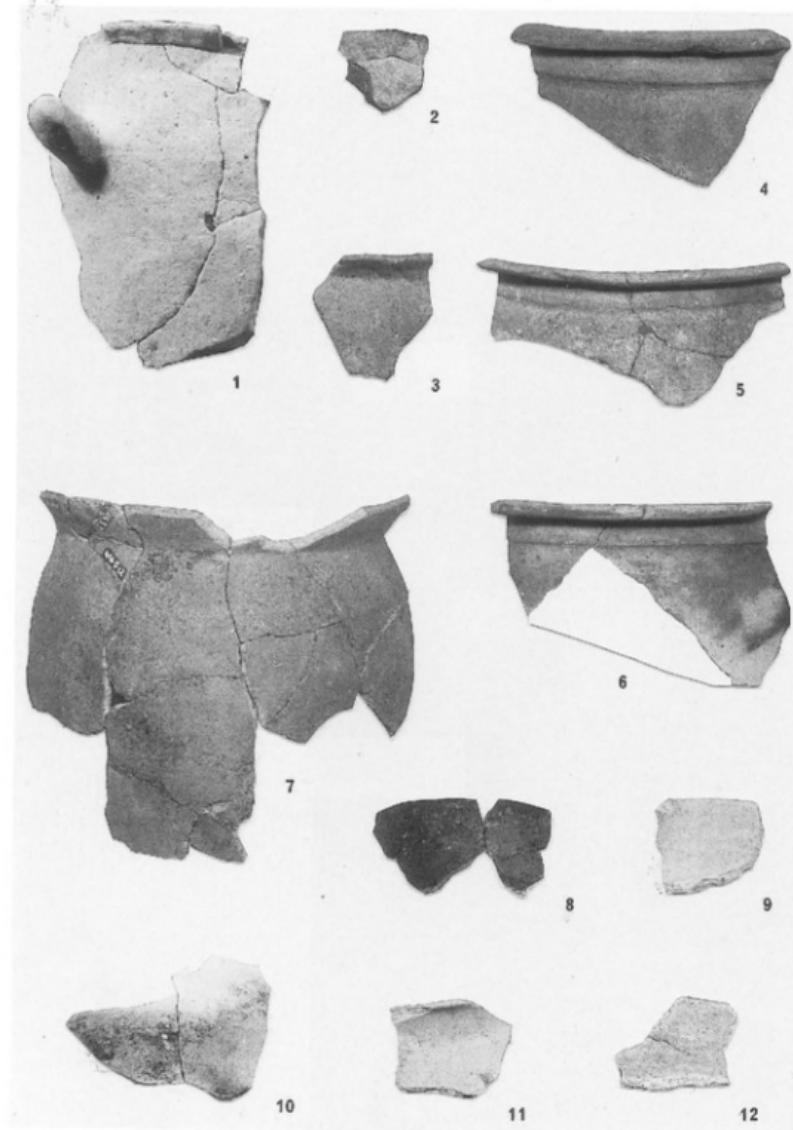


調査風景

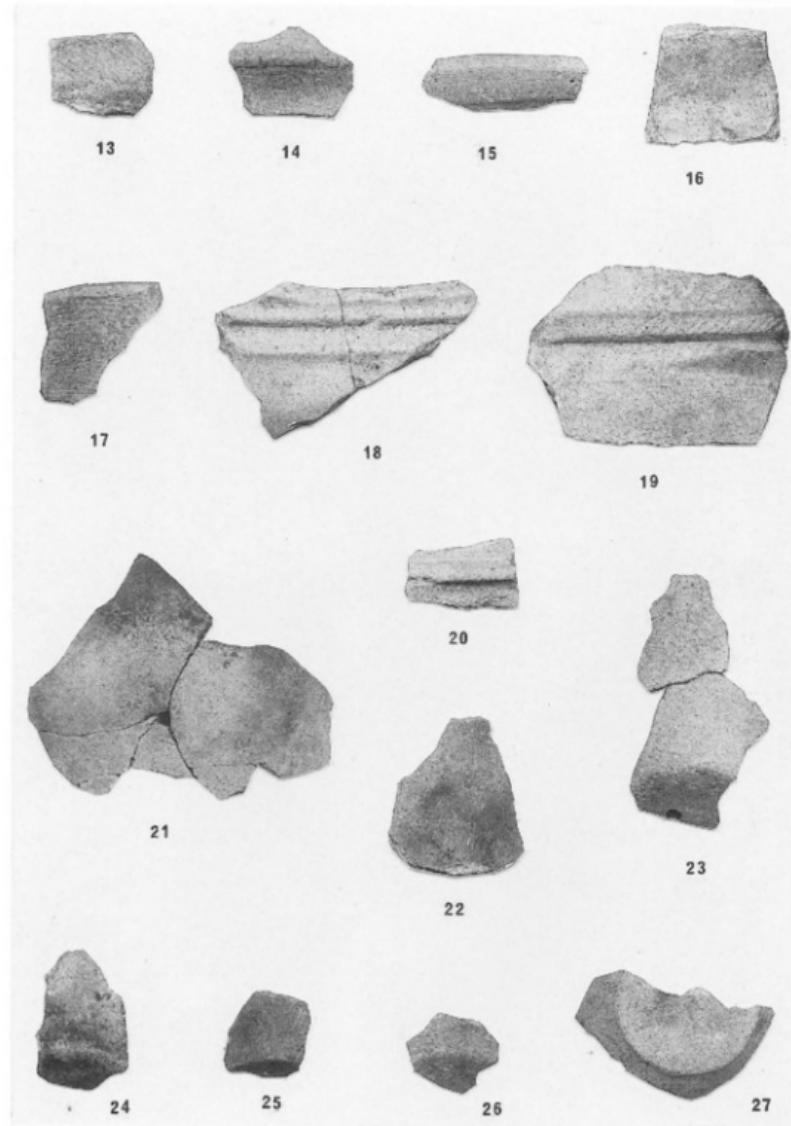


本調査区全景（南から）

圖版 4

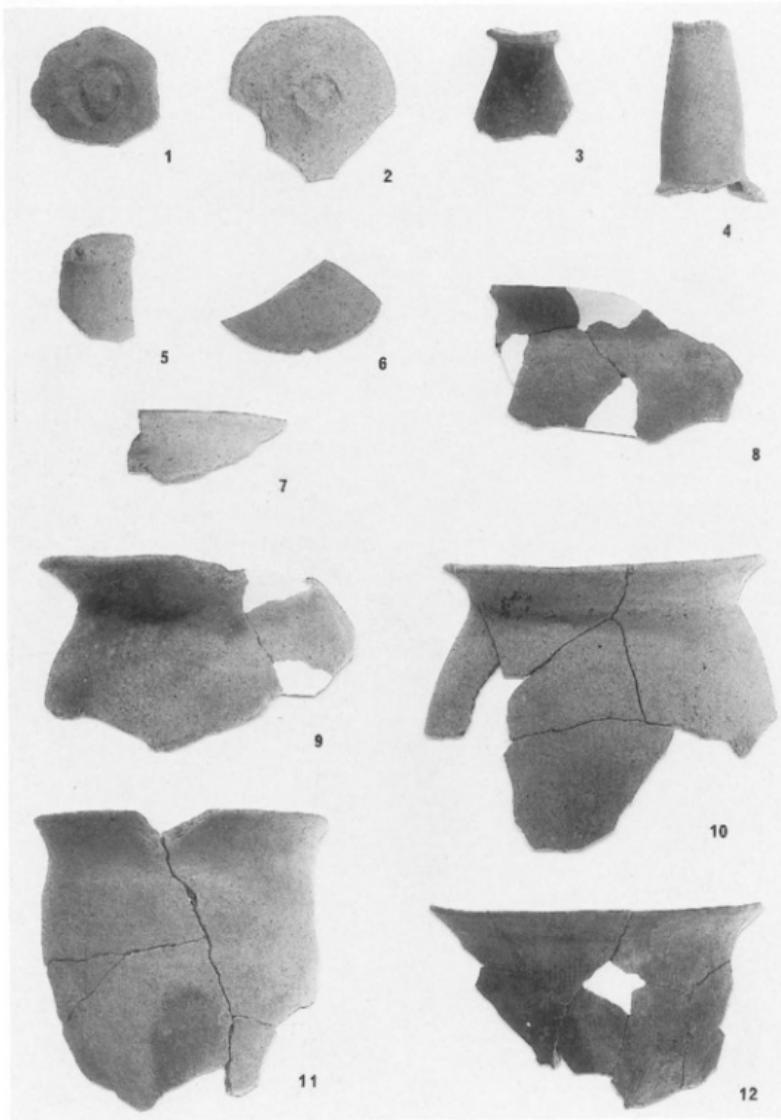


弥生時代遺物① ($S = 1/3$)



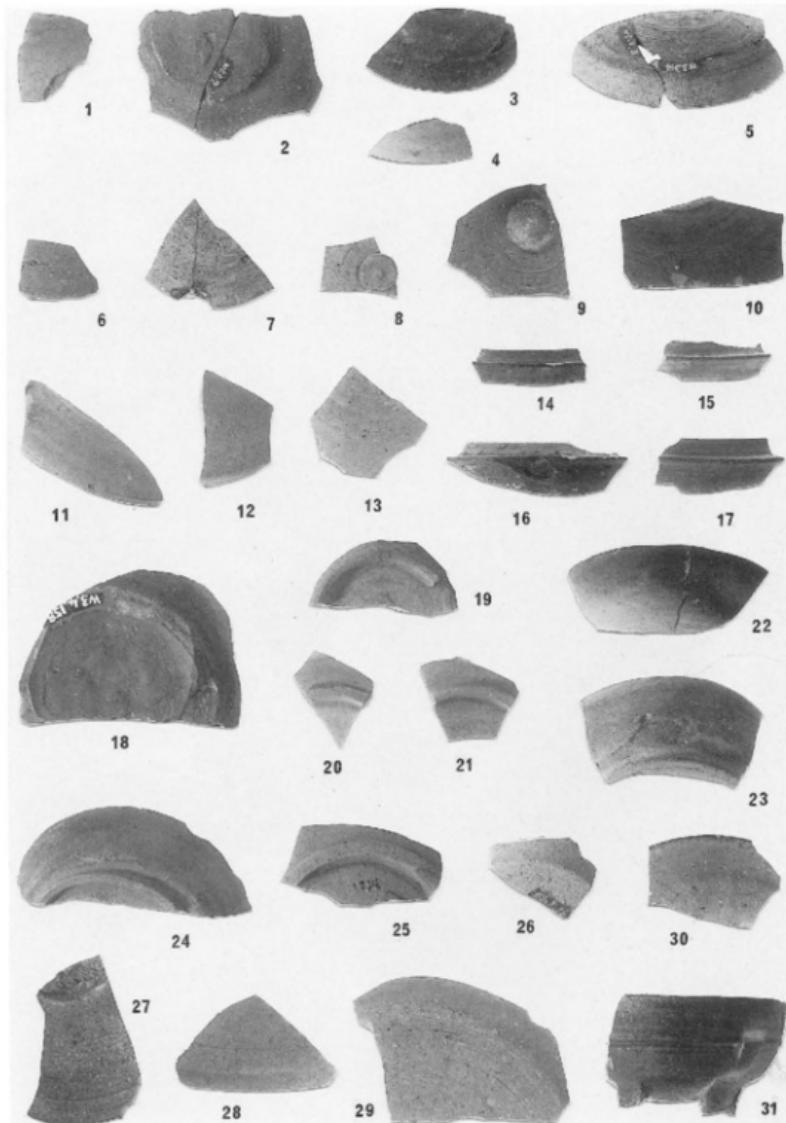
弥生時代遺物② ($S = 1/3$)

図版 6



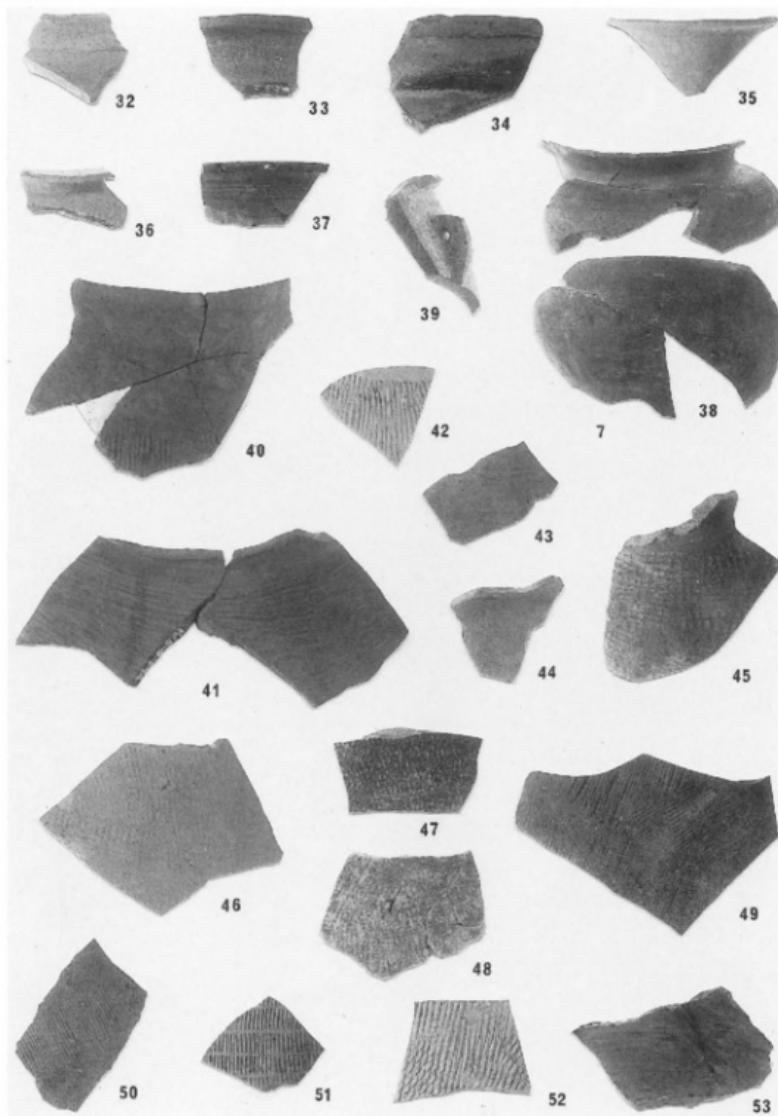
古墳時代遺物① ($S = 1/3$)

図版 7



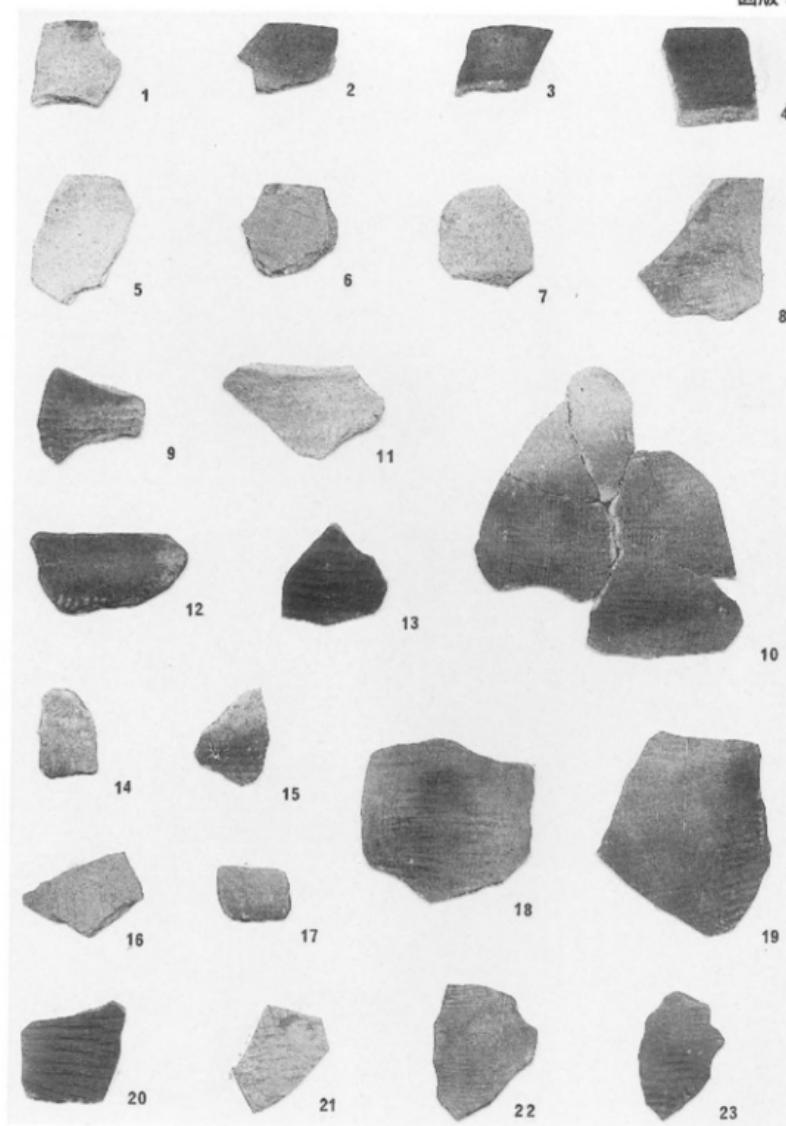
古墳時代遺物② ($S = 1/3$)

図版 8



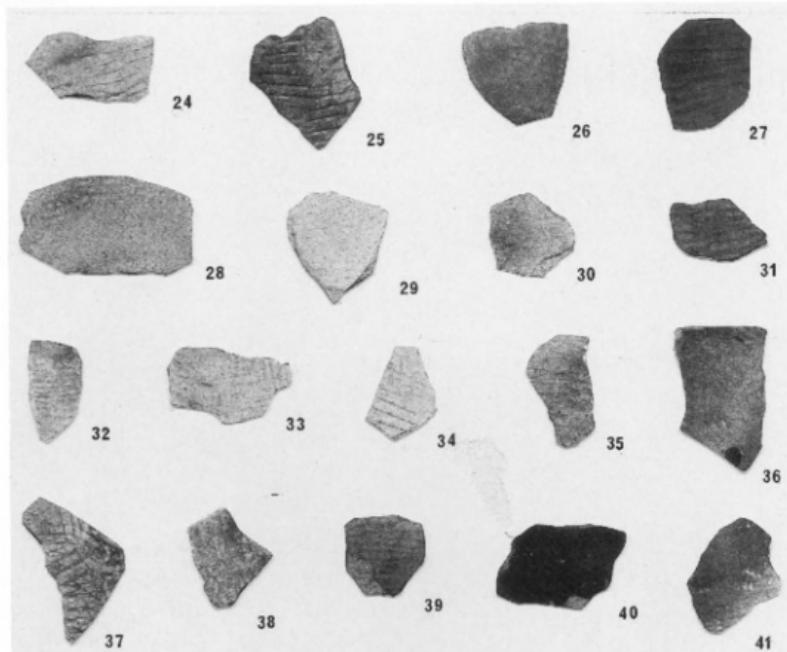
古墳時代遺物③ (S = 1 / 3)

図版 9

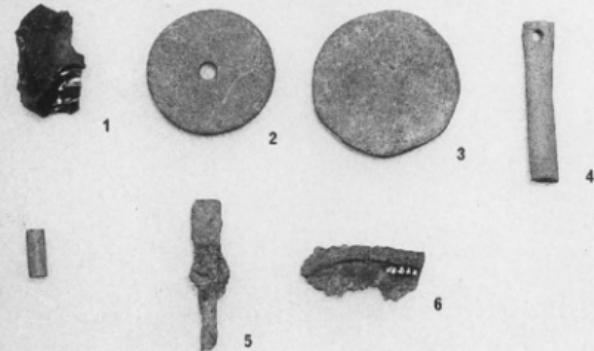


製塩土器① ($S = 1/3$)

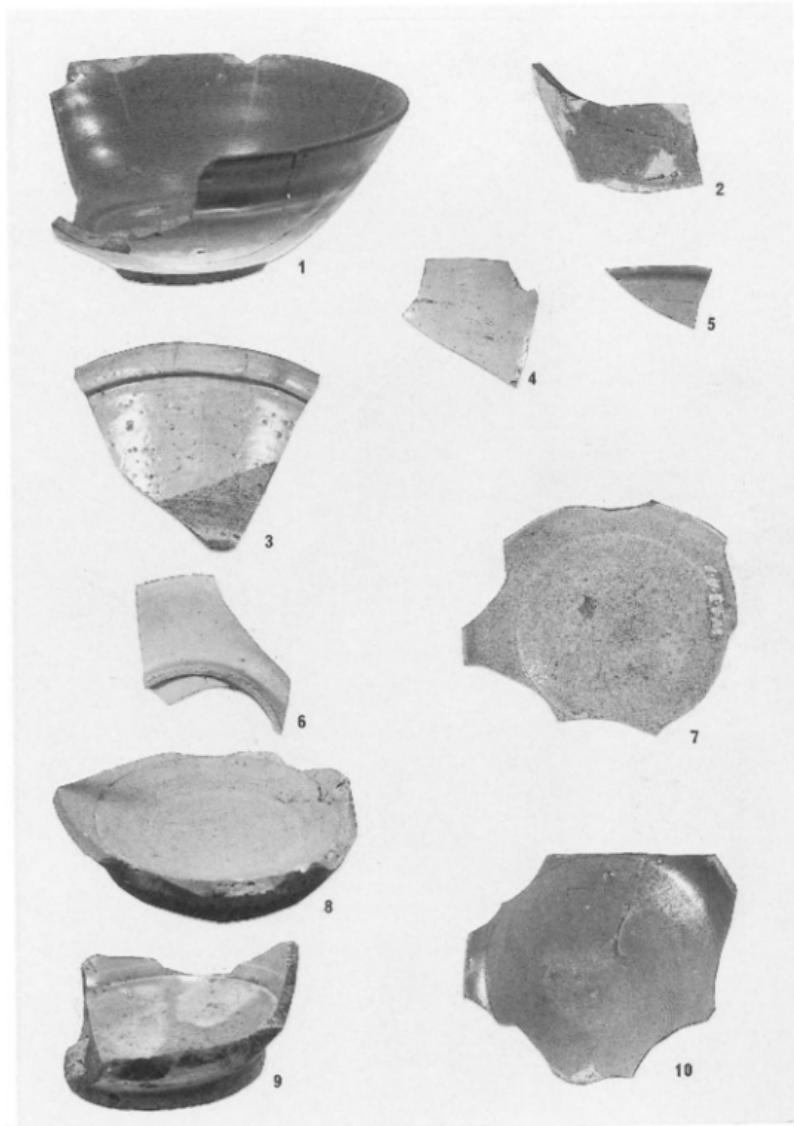
図版10



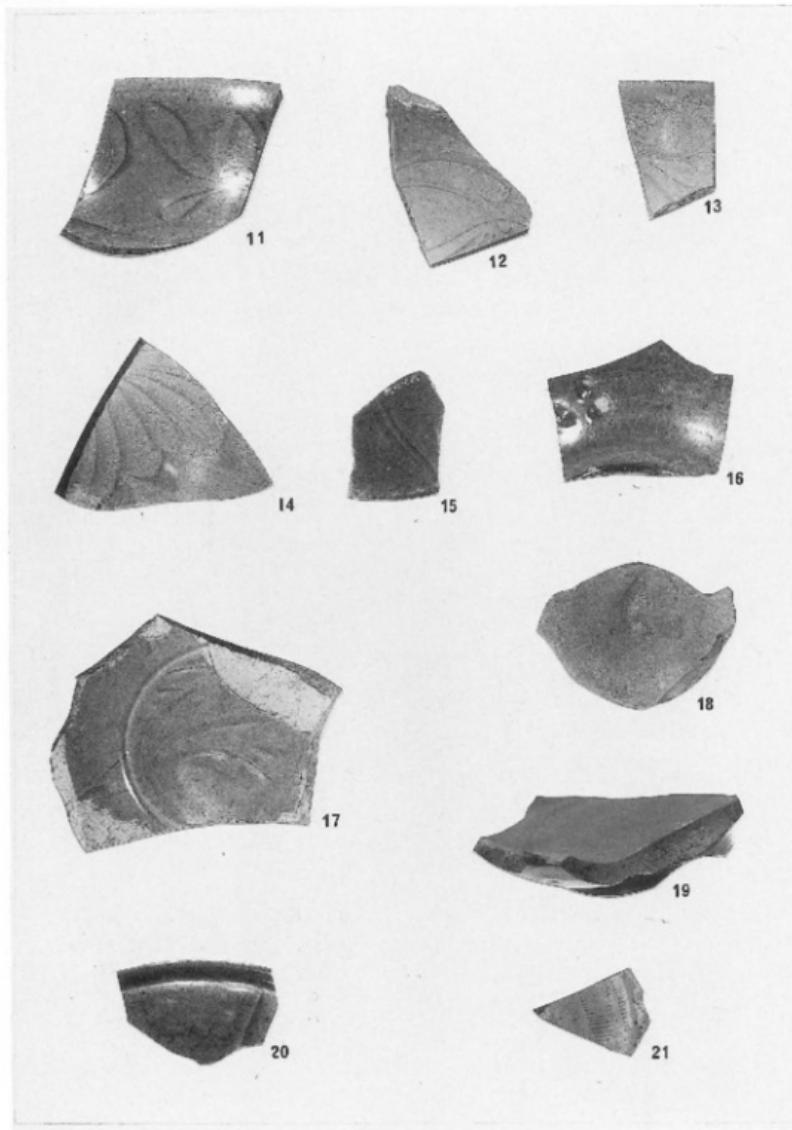
製塩土器② (S = 1 / 3)



その他の遺物① (S = 1 / 2)



輸入陶磁器①



輸入陶磁器②



22



23



24



25



26



28



27



29



30

輸入陶磁器③

図版14



31



32



33



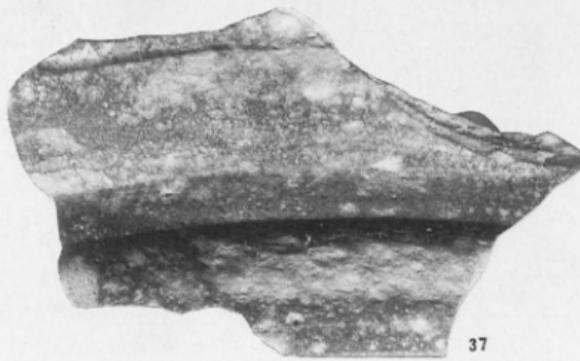
34



35



36



37

その他の土器



1



2



3



4



5



6



7



8

その他の遺物② ($S = 1/3$)

図版16



試査調査参加者



本調査参加者

大田原ヤモト遺跡

峰町文化財調査報告書 第10集

1993年3月31日

発行 長崎県上県郡峰町教育委員会
長崎県上県郡峰町大字三根451番地
電話09208(3)0301

印刷 株式会社 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007